ミュンヘンへの道

オリンピックの規模縮少が最近また取り沙汰されている。

各国際競技連盟（ＩＦ）は、拡がるばかりのオリンピックをなんとかしなくてはと思う反面、いざ参加者（国）数の削減するとなると腰が重くなる。この問題の難しいところで、これまでも何度か話題となりながら立ち消えになっていた。

しかし今回はかなり具体的にコトが運んでいる感じである。

昨秋アジア予選のため来日した国際ハンドボール連盟（ＩＨＦ）のＥ・ホルル技術委員長も国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）から『参加国数の縮少』を指示されていることを明きらかにし『いまＩＨＦがかかえている最大の課題だ』とも語っていた。

ある消息通は、巨大化するオリンピックへの反省がある以上各ＩＦともモントリオール（一九七六）大会をなにがなんでもミュンヘンと同じ規模で行なおうという気持はうすくなっているのではないか、とみている。

ハンドボールの場合少なければ8、多くても12ケ国（注・ミュンヘンは16）の可能性が濃い。となれば日本ハンドボール界にとってもオリンピックへの道はいちだんとけわしいものになるわけでようやくつかんだオリンピックの栄光が再び遠いものになってしまう危惧を感じないわけにはいかない。

オリンピックまで5ケ月というこの時点でさえも斯界がミュンヘン後どのような歩みかたをするか、不安なまなざしで見ている人もあるのだ。

史上最強といわれる現在のナショナルプレイヤーにつづくものの育成と発掘――ナショナルチームの多層化に向かってジュニアの強化など一連の頂点対策をまず底深いものにする必要がありそうだ。

町の、クラブの、ママの、子供たちのハンドボール開発という大命題もある。

頂点と底辺の歯車をどうかみ合せるかこの〝両輪策戦〟を完成させるには慎重に長期計画をねりあげなければなるまい。しかしミュンヘンの結果を待っていては遅い。「ミュンヘンを目指した時期」はすでに終り新しい段階を迎えているのだ。

将来計画さえ成ればオリンピックの道がいくらせばめられようとも、いつでもゆうゆうと通り抜ける自信を得られるであろう。

（杉山）

時　評

嬉しいニュースが二つつづいた。

一つは本誌でも紹介されているＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）の〝日本賞讃〟である（19及び23頁参照）

アジア予選で見せたクイックプレー、世界女子で示したフェアプレーが高く評価され特に男女ともラフな傾向に流れている現代のヨーロッパ・ハンドボールと対照的である点が強調されたのは大いに誇ってよいと思う

日本が競技規則に忠実なことは自他ともに認めているところであり、いささか神経質にすぎて試合の流れを無視、興をそぐケースさえあるのだが「正しい理解」としてそれは支持されてきた。

そうした平生のマナーが、うるさがたの並んだＩＨＦの技術委員たちの目に好ましく映ったのである。

ヨーロッパのビッグゲームはすさまじいばかりの激突の繰り返しだ。それがファンの興奮をよびスタンドは大観衆で埋まる

選手も熱狂的な雰囲気にのせられて必要以上にエキサイトする。「日本の試合はおとなしすぎる」とも聞いたが、やはりこのみかたは間違っているのである

日本のフェアで、スピーディなハンドボールが本場・ヨーロッパのファンに〝新しい興奮〟を与えることができるとすればすばらしい。

それがミュンヘンという檜舞台の上でのできごとならこれほど痛快な話はあるまい。

▽

村田弘オリンピック対策部長が関西運動記者クラブの46年度最優秀指導者に推され表彰をうけた。村田氏自身にとっても、斯界にとっても光栄であり、特に権威あるスポーツライターの人たちの総意による推せんであったことは特筆されよう。

国内スポーツ界のなかで、ハンドボールは極めて地味な存在であった。いわゆるマスコミの扱いも恵れたものではない。

地道な努力を実らせてオリンピック出場権をつかみ、それを機会に「ハンドボール」の名を知る人ががぜん多くなった。

上昇ムードの中での村田氏の受賞は今後にいっそう大きなはげみを与えたといえる。

ＩＨＦ、関西運動記者諸賢らが斯界へ向けてくれた暖かいまなざしにおごることなく、これまで以上の精進をつづけることこそ〝栄光の評価〟への報恩といえよう。

（Ｘ）

「ハンドボール」4月号（第96号）目次

【表紙写真】日独親善第3戦・ＴＨＷキール対大崎電気戦から（3月20日・東京体育館）（撮影・山田真市）

速　報

オリンピック出場正式に決定
晴れの代表は12名（役員含む）に

日本ハンドボールのミュンヘンオリンピック出場が正式に決まった。――今夏8月ミュンヘン（西ドイツ）で開かれる第20回オリンピック競技大会への参加競技について検討を進めていた日本オリンピック委員会（JOC）は3月初旬の強化委員会で出場権を持つ19競技すべてにエントリーすることを確定、3月30日午後4時から東京・岸記念体育会館で開かれた臨時JOC総会で正式決定したものである。

日本のハンドボールチームがオリンピックの日本選手団（デレゲーション）に加るのは初めてのことであり、日本ハンドボール史上永く記憶されるべき快挙といえよう。

注目の派遣人員については3月7日と21日の2回にわたって強化委と日本協会（荒川理事長、村田オリンピック対策部長出席）が折しようを行ない、結果的には日本協会がJOCの示す〝少数精鋭・実績優先主義〟から割り出した役員1、選手11の計12名を了承、この数字に決まった。注＝フルエントリーの場合は役員2、選手16。

（詳報、解説など次号）

47年度 ナショナルチーム決まる

日本協会はオリンピック強化対策と併行して男子ナショナルチーム編成の検討を進めていたが、3月4日の月例常務理事会で村田オリンピック対策部長、勝技術指導部長からその骨子が発表された。

それによるとオリンピック選手は候補段階を含めてあくまで47年度ナショナルチームのなかから選出するという当初の基本方針を貫くこととし、昨年末に選考した25名の候補選手（本誌第94号参照）をそのままメンバーに推せんした。

オリンピック対策部では代表選手決定までに第2次、第3次……と候補をさらにしぼる予定で第2次候補は15名前後になろう。

注目されるのはオリンピック候補からはずされてもナショナルチームとしてのメンバー資格は残すという〝新解釈〟だ。ヨーロッパ諸国の採っているシステムがようやく日本でも実現できたといえよう。

当初の計画では、25名のオリンピック第1次候補選手を2回の強化合宿（2月大阪、3月名古屋）後、20名程度にしぼり、そのメンバーを「47年度ナショナル兼第2次オリンピック候補選手」とする予定だったが、2月の合宿中、村田オリンピック対策部長を中心としたコーチング・スタッフが新しい方針を打ち出したものである。

―昭和47年度男子ナショナルチーム―

	氏名	全日本入り	出場数
F	木野　実	41年9月	㉝
F	近森　克彦	41年9月	㉝
F	飯田　誠行	41年9月	㉛
K	下里　敏彦	44年2月	㉑
K	本田　洋	44年2月	㉓
F	東　一敏	44年2月	㉑
F	早川　清孝	44年2月	⑱
F	野田　清	44年2月	㉖
F	藤中　憲二	44年2月	⑱
F	中井　武三	44年2月	⑫
F	有永　修二	44年2月	⑭
F	斎藤　光男	44年9月	⑪
F	新実　俊夫	44年9月	⑤
F	花輪　博	45年4月	・
K	大村　久	45年9月	④
F	氷海　正行	45年12月	⑥
F	大江　隆夫	46年7月	⑤
K	馬淵　豊明	47年3月	・
K	高橋　誠	47年3月	・
F	浅原　俊治	47年3月	・
F	荒井　正人	47年3月	・
F	高梨　豊	47年3月	・
F	佐藤　要二	47年3月	・
F	松岡　猛	47年3月	・
F	佐々木健一	47年3月	・

・FはFP，KはGK
・年月は全日本入り時期
・○内数字は公式国際試合出場数

6月中旬に代表決定？

今後の方向について消息筋は、5月にヨーロッパ遠征が実現されれば（別掲）、その遠征メンバーを「オリンピック最終候補選手」として発表するものとみており晴れのオリンピック代表選手決定はヨーロッパから帰国したあとになると予想している。

荒川理事長も「コーチと代表選手は全国評議員会、全国理事会（場合によっては合同会議）を招集して決定したい」の意向のようで6月中旬説が有力である。

またオリンピックに臨むコーチング・スタッフは日本オリンピック委員会（JOC）の派遣ワクの最終指示が1名なため、難産となりそうでともかくも正式発表までの期間は村田オリンピック対策部長がヘッドコーチとしてナショナルチームの指導にあたり、国際試合、強化合宿などのたびに2～4名のアシスタントコーチがオリンピック対策、技術指導両部から指名されることになっている。

なお、女子ナショナルについては6月のNHK杯終了後、改めて話し合われる予定である。

全日本男子、欧州遠征具体化へ

ミュンヘンオリンピックの上位入賞を目指す日本協会は3月4日東京で開いた月例常務理事会で5月から6月にかけて全日本（オリンピック候補）をヨーロッパへ送りこみ強化の一環とするよう具体案をねることになった。

全日本男子のこの時期における欧州遠征は昨秋アジア予選終了直後からオリンピック対策部によって強く要望されていたもので、遠征費用については47年度一般会計予算外とし、特別基金を田村会長荒川理事長が、主に実業団オーナーから協力を求めて充当させる。

日本協会では、資金問題のほか相手国の受け入れ体制なども不安定な点があり遠征人員についても首脳陣の見解が異なるため4月14日の月例常務理事会で最終的な協議を行なう。

4月中に抽せん

～オリンピック組み合せ～

組織委「競技要項」を発表

ミュンヘンオリンピック組織委員会と同ハンドボール競技組織委員会はこのほど今夏8月30日から9月9日までミュンヘンを中心に行なわれるオリンピックハンドボール競技の競技要項を発表した。

競技要項は8章からなり英、独仏三ケ国で発表されたが、注目の予選リーグ4組（各組4ケ国）の組み合せ決定方法は第3章第6条で細かく規程、4月中に国際ハンドボール連盟（IHF）と組織委員会の手で抽選されることが明らかとなった。

組み合せの〝原則〟は一九七〇年（昭45）パリで行なわれた第7回世界男子選手権の最終順位を基にしたランキングを優先する点にある。条文にもとづいてランク別を試みると

▽第1ランク　ルーマニア（世界選手権1位）、東ドイツ（2位）、ユーゴ(3位)、デンマーク(4位)

▽第2ランク　西ドイツ(5位)、スウェーデン(6位)、チェコ（7位）、ハンガリー(8位)

▽第3ランク　ソビエト(9位)、日本(10位)、アイスランド(11位)となり、このほか出場権を得ているノルウェー、ポーランド、スペイン、アメリカ、アフリカ代表（3月30日に決定）の5ケ国のうち1ケ国が第3ランクに、残り4ケ国が第4ランクとなる。

予選リーグの組み合せはランク別された4ケ国をABCDの4組へ抽せんによって振り分けるわけで、同ランクの国が予選リーグで顔を合わせることのないようにしてある。

言葉をかえれば予選リーグ各組は各ランクから1ケ国づつの計4ケ国で編成されるわけだ。

〝ドーピング〟検査も明記

会場については、ハンドボールはミュンヘンの大体育館（収容力一一、五七五名）だけでは日程が消化できないため予選リーグに限ってはボブリンゲン(五千名)、ギョッピンゲン(三千二百名)、ウルム（二千四百名）など4都市の体育館も使用されるのが目立つ。

また、レフェリーは24名でこの名簿は近くIHFから発表されるという。

このほか、ドーピング(興奮剤)コントロールについて第2章第5条で「各試合後、国際オリンピック委員会（IOC）メデカルコミッションが定めたさしずにしたがってドーピングに関する試験が行なわれる」と明記されている。

【本誌では後日「競技要項」を掲載する予定です】

ジュニア・ナショナルの強化白紙へ

高校生の日程が難行

全国高体連は2月13日の定例全国委員会で日本協会が企画している「ジュニア・ナショナル(男女)」編成と強化について協議、主旨に異論はないが、強化合宿の日程が予定では8月の全日本高校選手権直後、大会開催地でとなっていることに難色を示し、強化計画は事実上白紙にもどった。

全国高体連は選手権直後では早いラウンドで敗退したチームの優秀選手を残しておくことが難しい

男子の優勝校には日韓大会が控えているなどで無理があり、また他の期間では学業などがからんでくるとしている。

担当の日本協会技術指導部では夏期休暇後以外に好機はないとして改めて検討しなおすことになった。

日韓高校女子を検討

全国高体連ハンドボール部は2月13日東京で全国定例委員会を開き、懸案の日韓女子高校交流を遅くとも来年度には実現させるよう検討を進めていくことになった。

男子の交流はすでに6回を数え日本体協の日韓高校交歓競技会の実施種目になっている。

全国高校の開催地　全国高体連は来年度の全日本高校選手権を四日市市（三重）で、49年度は北九州市（福岡）で行なうことを決めた。

なお、来年5月3日から沖縄で開かれる沖縄特別国体には「高校女子」が実施される。

財務担当に神田氏新任

日本協会は3月4日の月例常務理事会で財務担当として神田清常務理事を新任した。これで未決定のままの47年度事業予算は4月中旬に組み立てられる見通しがついた。前財務担当の森岡毅雄常務理事が勤務の関係で辞任されたための交替である。なお、森岡氏は当分の間理事として残る。

大分協会長に脇屋氏

大分協会はこのほど新役員を次のように決め発表した。会長（日本協会評議員）、理事長とも新任。

▽会長　脇屋長可（日産サニー大分販売KK会長）▽副会長　加藤享、疋田忠▽理事長　福田稔（県立領南高野津原分校）

荒川理事長に聞く

新年度開幕にあたり本誌では日本協会・荒川清美理事長に当面する課題への対策、今後の抱負などを聞いてみた。（文責・編集部）

――宿願のオリンピック参加が実現し、上げ潮ムードですがミュンヘンへの抱負から聞かして下さい。

荒川理事長　昨秋アジア予選で快勝して以後、私は機会あるごとに今回の宿願達成はナショナルプレイヤーのみの栄光ではなく辛苦の時代を耐えられて来た諸先輩、そして後につづくべき若い選手諸君など新旧一丸となった結晶であるといって来たわけですが、実はハンドボールが国内スポーツ界に一つの位置づけを行なえるかどうかは今後の努力にかかっていると思うのです。その努力はこれまで以上に厳しいものでなくてはなりません。

――アジア予選での快勝とオリンピック出場はたしかに多くの人たちに「ハンドボール」というものを知ってもらえたと思うのですがこのムードをいっそう引きあげるためにはどのような構想をおもちですか。

理事長　私個人は金メダル至上主義を全面的に支持できないのですが、ハンドボールの理解を得るにはやはりオリンピックという場をステップにすることが最適であると痛感しております。

せっかく参加を果たした以上ミュンヘンでは好成績をあげるよう最大の努力を払って欲しいとオリンピック対策部長にも話しておりますし、ここで上位の成績をあげることが日本体協、日本オリンピック委員会(JOC)、報道関係者をはじめ支援して下さったすべての人たちへの〝お礼〟にもなると思います。

――上位入賞が目標なわけですね。

理事長　悪くても8位には入って欲しいのです。

――東欧圏の強豪が居並ぶほかミュンヘンをきっかけに飛躍を遂げようとする国ばかり、卒直にいってその中から8位に飛び出すのは容易ではないと思うのですが。

理事長　たしかに楽観は許せません。しかし日本人らしい技術を徹底してマスターし、小さくてもこれだけのことができるのだという気力を示せれば必ずやよい結果がでると信じています。

私はそれによってハンドボールというスポーツが日本人に適したものだということを実証できるとも期待しています。

――大きな花が咲こうとする段階で具体的な対策がありましたら聞かせて下さい。

理事長　東京、大阪、名古屋ではいわゆるハンドボール関係者以外の人たちにもこのスポーツが理解されはじめたとみています。その輪を拡げる努力としてトップレベルを地方に侵透させることを考えたいのです。

かつて成果をあげたナショナルチームの国内サーキットやビッグチームによる地方での公開試合などを積極的に推進させ、時にはアウトドアでの実施も試したいものです。

これらの企画は『日本のハンドボールは強くなった、巧くなった』ことを強調すると同時に、ハンドボール競技が老若男女誰にでもすぐできるスポーツだという認識を植えつけることにも主眼をおきたいのです。

――ブームを呼んだサッカーにしてもバレーボールにしても市民生活への密着が大きな要素になっているわけで、この点斯界は立ち遅れているようですが。

理事長　立ち遅れているというよりも、これまではともかく自分たちの囲いの中のものを高度化させることに手一杯で、外にまで力を伸ばせなかったのが実情です。

――市民スポーツへの進出に日本協会はどのようなプランがありますか。

理事長　底辺は底辺でという考えにそってむしろこうしたことは地方協会の手で行なう方が効果があると私は思うのですが――。

愛知協会の「少年少女ハンドボール教室」などその好例でしょう

もちろん日本協会としても講師の派遣やスライドの貸し出しなどできるだけのカバーは考えます。

――ところで、宿命的な泣きどころとまでいわれる財源の確保ですが。

理事長　登録料などを財源とすることには限界があり、どうしても事業収入を企らねばなりません

高いレベルの試合を行なって競技収入をあげることを中心に考え

るつもりですが、それにはハンドボールの人気を高めさせねばなりません。ミュンヘンでの成績が一つのカギになるでしょう。

ともかく、ここ一、二年はハンドボールを行なっている人の協力を求めるほかないのです。

日本協会の必要経費も切りつめにつめています。どの項目をとってももうこれ以上削り切れないところまでいってなお収支は見合わないという窮状を切り抜けるには関係者、チームの負担以外ないことを判って下さい。

また、機関誌などを通じて日本体協の競技力向上費やスポーツ振興金がどの程度なものかを理解していただきたいとも思うのです。

事業を行なうにも、男女の強化を進めるにも、世界選手権へ出場するにも大半の部分は自分たちの手でつくり出さなければならないのです。これはアマチュアスポーツとして当然の態度です。

（編集部注・昭和46年度の体協競技力向上費は百九十八万円、スポーツ振興金は六十万円）

――女子へのバックアップが足りないという声にはどう感じられますか。

理事長　たしかにミュンヘン、ミュンヘンで男子偏重でした。

しかし男子と同じように強化しなければならないことは忘れていません。実業団に歯が立たない学生界の現況打開、高校チームの有望選手の力をなんとか引き伸ばす方法はないか、といったことを中心に学連関係者や高体連関係者に会って話し合い、圧倒的な実業団の実力を中心として国内のレベルアップを当面のテーマにするつもりです。

――オリンピック出場を機に"日本協会"も一つの転機にさしかかっているというみかたがありますか。

理事長　日本のハンドボール界も大きくなりましたし成長しています。これまでの仕組みや運営態度がマッチしないようなら改めることにやぶさかではありません。人事面での若返りは時間が解決することではないでしょうか。

――このほか理事長として是非手がけたいことはありますか。

理事長　今夏初めて実施する全国中学生大会は是非とも成功させたいものです。

中学の大会を開くにはタテの組織が不充分ですので、協会あげて万全を期すつもりです。

また、審判の国際進出も念願なのですが、国際ハンドボール連盟のホルル委員長もそれには国内におけるレフェリーのレベルアップが不可欠だといっており、充分心がけたいと思います。

アジア予選以後、報道関係者の協力にも感謝しています。

マスコミ対策は斯界でも遅れていたことなのですが、やはりプレスに採りあげられ、目を向けていただくにはそれだけの活動や実績がなくてはなりません。この姿勢を中央、地方問わず徹底させるつもりです。

――長い時間ありがとうございました。（3月20日東京体育館で）

"五輪正式参加を喜ぶ"

荒川理事長は3月30日、日本オリンピック委員会（JOC）によるオリンピック出場正式決定のあと報道関係者に次のように語った。

▽

海外で開かれる国際的な競技会の日本選手団にハンドボール代表が加わることは史上初めてであり実に嬉しい。

派遣人数は最低選手14名を要求していただけに不満が残る。オリンピックでの実績がないチームゲームは、ベンチに入れる人数から1を引くというJOCの"方針"は今回限りのものであって欲しい

男子ナショナルチーム強化方針

◇精神力の強化

・ナショナルプレイヤーであることを自覚し目標に対し意欲を燃やす
・勝負根性に徹し勝利の執念を養う
・勝つための猛練習に耐えぬき厳しさをもたす
・すべての動作に集中力を高める

◇体力の強化

・走りまわり動きまわってもへばらない体力づくり
・筋力の強化
・強化合宿以外のときの体力トレーニングの強化指導

◇防御力の強化

・防御技術の反復練習により防御体力の強化とあわせて気力の充実をはかる
・ヨーロッパチームの強力な攻撃を阻止できる防御力をつける
・頭脳を使っての組織力の強化

◇攻撃に日本チームの特徴を活かす

・速攻を最大の武器とする
・強力な防御に対し得点をとれる攻撃力をつける
・コンビネーションプレーに素早さ、変化、正確さを身につけた組織力の強化

◇基礎技術の徹底

・忠実なプレーを身につけミスをなくす
・スピード、力強さ、正確の増強
・個人の能力を高める

「日本実業団女子」が韓国遠征（女子で初）

全日本実連は3月20日名古屋で5月中旬韓国に遠征する「日本実業団女子選抜チーム」の役員4名、選手14名（GK3、FP11）を決め発表した。日本の女子チームが韓国に遠征するのは史上初めて。一行は5月中旬訪韓し、10日間5試合を行なう予定。

訪韓日本実業団女子選抜軍				
▽団　長	田中　滋章	(35)	全日本実連理事長	
▽監　督	近藤　金博	(36)	東京重機監督	
▽コーチ	池田　鉄哉	(30)	日本ビクター監督	
▽総　務	田口　侑義	(33)	東北ムネカタ監督	
GK	長岡　範子	(21)	東京重機	160
	和田　祥子	(20)	大崎電気	167
	佐藤　玲子	(20)	ブラザー工業	168
FP(主)	蓮見二三恵	(25)	日本ビクター	167
	佐藤あや子	(20)	大崎電気	167
	村中佐千子	(21)	大洋デパート	165
	広森　和代	(20)	田村紡	165
	八重樫優子	(22)	日本ビクター	163
	蔵田　照美	(21)	大洋デパート	163
	村上　朋美	(21)	東京重機	163
	藤浪　泰子	(20)	ブラザー工業	161
	金村美代子	(20)	ブラザー工業	158
	伊賀かほる	(22)	東北ムネカタ	154
	辻　　敏子	(20)	田村紡	154

右の数字は身長（cm）

昨シーズン実業団の白花醸造、学生の梨花大が来日、これまで閉ざされていた日韓女子交流がにわかに活気づいたが、日本から女子チームが韓国に遠征するのは初めてであり特筆すべきことといえる。

発表されたメンバーで注目されるのは、いわゆるベテランは蓮見、八重樫の日本ビクターコンビだけ、あとは実業団の有望な若手によって占められ、昨冬の第4回世界女子選手権（オランダ）に出場した全日本代表選手が一人も加っていない点だろう。

日本女子界に圧倒的な勢力をもつ全日本実連が、次の世界選手権（注・一九七四年モスクワが有力）への強化対策を日本協会にさきがけてスタートさせたともいえ、各方面からの注目と支持を得よう。

コーチングスタッフの意気ごみも高く3月4日から名古屋で強化合宿を行なって備えている。

韓国の実力はトップにある白花醸造が、昨夏の全日本実業団選手権（熊本）で3位の成績をあげたことから推察できるが、そのごいちだんとパワーアップしているようだし、日本戦法の研究も充分とみられる。遠征のハンデなど考えあわせると日本チームも楽観は許せない。

対戦チームの正式決定は4月上旬となろう。

なお、遠征チームは4月14日午後3時30分から名古屋・愛知県体育館で世界選手権代表と公開試合（兼世界女子選手権報告試合）を行なう予定だ。

全日本女子の陣容　日本協会は日本実業団女子選抜と対戦する「全日本女子」のメンバーを次のように発表した。

▽コーチ　井薫（大洋デパート監督）▽GK小原（大洋デパート）北岡（愛知教員ク）▽FP　垂水枝尾、渡辺、三宅、米、島田（以上大洋デパート）牧野、滝口、古佐原（以上東京重機）寺尾、三浦（以上大崎電気）三毛（田村紡）

NHK杯の女子実連代表は選考試合で…大洋デは決定

全日本実連は第19回NHK杯全日本選抜大会（6月・大阪）の女子実連代表3チームをいずれも単独チームとし、このうち1チームを大洋デパート（熊本）に決定、残る2チームはセレクションマッチで選ぶ。

資料とすべき昨シーズンが世界選手権のため、各チームとも主力メンバーを欠いた対戦が多く、残留軍で和歌山国体を優勝した大洋デパート以外のチームには決定的な推せん理由がないことによる。

試合は4月29、30の両日名古屋のブラザー工業体育館で行なわれるが、各チームがベストメンバーで戦うのは昨年7月の全日本実業団以来、新戦力を加え、セレクションマッチとはいえ今年の女子実業団球界の勢力を占う意味でも注目される内容となろう。

なお、男子の2代表は大崎電気（埼玉）と他のチームからの選抜軍になる予定。

【女子選考試合日程】▽4月29日・予選リーグA組＝田村紡（三重）×東京重機（東京）、東京重機×大崎電気（埼玉）、田村紡×大崎電気同B組＝ブラザー工業（愛知）×日本ビクター（茨城）、日本ビクター×東北ムネカタ（福島）、東北ムネカタ×ブラザー工業、▽30日、代表決定戦　A組1位×B組2位、B組1位×A組2位

昭和47年度日本協会役員

▽会　　長　田村正術
▽副 会 長　保坂周助，西　敏郎，渡辺和美，林　達夫，徳永陸繁
▽理 事 長　荒川清美
▽常務理事　村田　弘，勝　繁夫，安藤純光，渡辺慶寿，藤本　強，嶋田新太郎，久田 暁，杉山 茂，山田　計，入江暢一，栗脇　嶷，田中秀夫，田中滋章，富永　劭，宮崎慎六，渡辺一己，佐野和夫，神田　清
▽理　　事　森岡毅雄，岡村昭二，石切山稔治，佐藤　敦，角　勉，森田正英，丸口哲美，越智　武，藤田八郎，平仲孝栄，久保義雄，岡部正文，片瀬喜代次，清水正，長坂保於
▽海外駐在代表
　河内鋭雄（理事）
▽監　　事　山田　稔，古賀健一郎

▽専問委員会（○印部長又は担当）
・オリンピック対策部　○村田　弘，竹野奉昭，藤本 強，杉山 茂
・技術指導部　○勝繁夫，吉沢正登，北村尚英，佐野和夫，徳前啓人，片瀬喜代次，小西博喜，辻一義，石黒達夫，岡井幸由，大城光隆，江名英彦，望月伸三郎，高橋健夫，松岡富夫，八谷　稔，稲石三二，中沢重夫，北川勇喜，髙橋英次，近藤金博，井　薫，鈴木義男，池田鉄哉，福本　弘，広田公一，宇津野年一，北井晴次，藤原侑，川上整司
・審 判 部　○安藤純光
　・審判部長会議　松田徳之助，由利　弘，金原　至，清水　正，山田仁止，岡本克彰，柳井文治，越智　武，中西敬一，嶋田新太郎，藤田八郎，中沢重夫，近藤金博，福井正躬
　・審判審査委員会　山田　計，藤田信義，佐藤　敦，稲石三二，入江暢一，嶋田新太郎，藤田八郎
　・規則研究委員会　岡前義春，佐野和夫，藤原　侑，綿貫敏雄，大塚文雄，北川勇喜，高野　亮
・普 及 部　○渡辺慶寿，宮本西嗣，大西武三，小野基雄（以上中央委員）八重樫英治，森　恭一，遠藤健次，加藤雅之，中根武彦，狩野幸介，髙木敏行，川崎秀雄，荒木時弥，新垣　健，久保義雑，三浦　公，斎藤和夫，泉　正明，森永吉彦
・編集部　○藤本　強，杉山　茂
・総務企画部　○荒川清美
　・総務委員会　嶋田新太郎，杉山　茂，山田哲雄
　・企画委員会　杉山　茂，藤本　強
　・国際委員会　久田　暁，一宮昌平
・財務部　○神田　清，森岡毅雄
・事務局　○堤　慎，森岡美子

・このほか特別委員会として「中学問題検討委員会」を設置中

近く実施要綱を発表

準備進む全国中学生大会

新年度事業のうちミュンヘンオリンピックと並んでもっとも関心を集めている「第1回全国中学生ハンドボール大会」（8月18・19日愛知県青少年総合センター）の準備は着々と進み3月下旬になって全国中学校体育連盟の共催も本決りとなるなど順調だが初めての試みとあって、運営上の諸問題がからんで大会の具体的な実施要綱が発表されるのは早くとも4月中旬とみられ場合によっては原案の一部変更もあろう。

学校教育外活動として開かれるスポーツ競技会は、青少年運動競技中央連絡協議会の承認をうけて実施に移されるわけだが、今回の日本ハンドボール協会の計画に対して全国中学校体育連盟は「大会参加者並びに引卒者につとめて負担をかけさせない」ことを強く要望、このため日本協会では大会予算の具体的な算出を急ぎ宿泊費の全額負担を正式決定した。

また、大会の具体的な運営面でも二、三の問題が生じている。

特に、全国中体連の布くブロックのうち「関東」が日本協会のそれと異る点――中体連の関東ブロックは一都六県のほか新潟、長野も含む――は早急に調整が必要である。

競技法も当所は3チームずつ3組の予選リーグのあと各組同位者同士で順位決定リーグが予定されていたが、先の全国会議（評議員会・理事会）で参加チームを10としたため端数が生じ全面的に再検討することになりそう。

このほか参加者に対する保険や大会日程のこまかい部分についても課題があるようで普及部と愛知協会（開催地）はこのところたいへんな忙しさ、当初予定した3月中の実施要綱発表はムリとなったようだが、4月中旬までには全ぼうが明きらかとなろう。半恒久的な大会開催基準要綱も同時発表される。

なお、中学生大会運営の万全と円滑化を企るため日本協会に設けられた「中学問題委員会」は各ブロックからの委員選出を急いでいる。

【中学問題委員会】▽委員長　荒川清美▽常任委員　渡辺慶寿、入江暢一、栗脇嶷、嶋田新太郎（以上日本協会）、西川勤也（愛知協会）▽委員　熊田栄一（東北）、森田正英（近畿）、宍戸幸一（九州）、＝北海道、関東、北信越、東海、中国四国は未報告（3月25日現在）

(注)全国中学校大会初の会場地は愛知県愛知郡長久手町に新設される愛知県青少年公園内にある。

THW・キール（西ドイツ）底力示す

全日本が一矢

西ドイツ選手権3回の優勝を誇る名門「TV・ハッセー・ウインターベック・キール」（略称THW・キール）を迎えての日独国際親善試合は3月14日から20日まで名古屋と東京で3試合を行った。ミュンヘンオリンピック強化試合として行われた第1戦はアジア予選以来久々にナショナルチームが登場、得意の速攻と巧さを増したディフェンスをみせて快勝した。
しかし、単独チームの対戦による第2、3戦はキールが今シーズン西ドイツ3位にふさわしい底力を発揮し連勝、2勝1敗の成績を残して3月22日離日した。このシリーズは昭和13年9月のヒットラーユーゲントとの対戦を第1回に国内では9回目の日独親善試合であった。なお、日本協会では引きつづき4月2日から昨年度西ドイツチャンピオン「グルンワイス・ダンケルセン」を招いて富士市、名古屋市、大阪市で各1試合を行う予定である。

速攻冴えた全日本

若い力も進境

第1戦・全日本との試合は3月14日午後6時31分から名古屋市の愛知県体育館で行われた。審判＝山田計、稲石三二（ともに国際審判員）観衆＝約二千五百

全日本 20（11－6, 9－5）11 THW・キール

得	【全日本】			【キール】	得
0	馬渕（立教大）	GK	GK	ホイグト	0
0	本田（大阪イーグルス）	GK	GK	エールテル	0
5	木野（ワクナガ薬品）	FP	FP	バグーン	2
3	藤中（大同製鋼）	FP	FP	プレーン	0
2	有永（東京海上火災）	FP	FP	モール	1
2	野田（大同製鋼）	FP	FP	ベルク	0
4	飯田（大崎電気）	FP	FP	ハルプス	0
1	中井（大同製鋼）	FP	FP	ニールゼン	1
0	大江（芝浦工大）	FP	FP	ベルツ	4
0	新実（芝浦工大）	FP	FP	グレーパー	2
3	佐々木（中央大）	FP	FP	シュッツ	1
0	氷海（日体大）	FP	FP	チンマーマン	0
20	（0）	7MT	7MT	（0）	11

第1戦・全日本はデイフエンスに一段と力をつけた
（光島磯雄氏提供）

後記

村田　弘
（全日本ヘッドコーチ）

○…全日本に絶体勝ちたい意欲に燃えるTHWキールは至宝ポイントゲッター、アーレンゼン（ナショナルプレーヤー179cm）、チームリーダーベテランストラックが不参加、その上丸一日の遅れから時差ボケと疲労で迎えた第一戦は精神面と肉体面でアンバランスの状態にあった。
全日本は第一、二次合宿は体力強化が主な目的で第二次合宿の最終日に迎えたこの試合に対しコンビネーションは充分とはいえなかった。戦前の予想では全日本がキールの得意とする力と技をミックスしたローリング戦法、ボールを握っての変化とスピードのフェント技術をいかに防御し、日本の武器とする速攻で勝負できるかであった。全日本の作戦は相手のはげしい攻撃に対し徹底して防御を固め出鼻を砕く意味で速攻を成功させコンディションの不調をついて積極的にゲームを展開して行く、合宿でやったいくつかのフォーメイションプレーを大いに試してみることにした。そしてこのゲームの目標として、失点11、12点、得点18、19点とした。どちらかといえばやりやすい相手と予想した。
○…この試合は全日本にとってミュンヘンへの小手調でもあった。
試合開始1分サイドシュートをマークされていた野田がフォーメイションプレーにより逆サイドを強引に跳びこんで先行した。その後ミスと決め手のないゲームを繰り返して8分見事な速攻が藤中に出た。ジャンプ一番ボールはGKの足に好守された。3－0となるときだけにこの不成功は、やっと全日本がリズムを摑みかけてきた時だけに痛かった。GKの好守をきっかけに意気上ったキールは全日本の防御ミスをついて3分間に3点を連取し12分2－3と逆転。

た。その後両チームはもたつきながら20分迄5—5と一進一退が続いた。しかし、次第にキールは疲労が見え始め脚が止ったのに反し全日本はやっとリズミカルに動き出し、スピードと個人技でにぶった防御を圧倒し4分間に5ゴールして前半を11—6で終了した。

○…5点差で迎えた後半全日本はフォーメイションプレーを展開するスピードを欠き、うまくリズムに乗らず個人技と速攻で9点をあげた。キールも疲労で攻守に精彩なく、リードで余裕のある全日本の防御にさえぎられたがフェントから繰り出す早いシュートモーションで点をあげた。特に、ヴェルツの素早いシュートが印象的であった。結局20—11で終了した。後半は前半の点差とキールの実力が発揮できないため全日本もそのペースにはまり、迫力を欠きゲームにするどさを失い盛り上りのないゲームに終った。キールの条件の悪かったのが残念といえる

○…攻撃面では全日本の特徴とする速攻がいまひとつ判断力の悪さからくるボールの展開が遅く、セットオフェンスにおいてもっとロングシュートをねらっていかねばならない。プレーヤーがロングを打つより回した方がうまくいくだろうとロングをねらう判断力と勇気に欠けている。ねらうことによってポストプレーが生きてくるし相手の防御に猛威を与えるのである。防御面は相手に対するつめが遅いため相手の攻撃活路を開きシュートに結びつけた。もっと受身の防御でなく攻勢の防攻で立ち迎っていかねばならない。選手層のよくなったことはメンバーチェンジをしても戦力の低下もなく作戦転換ができるようになったこと、特に若い選手の進歩が大きい収獲といえる。この試合でも七人の選手がポイントをあげたことは誰でもがやれる自信をつけたといえる。しかし個人技は力強くなったとはいえ今後の練習で持てる個人技を生かしスピードと変化に富んだ正確な組織力の強化が大きな課題といえる。

○…本場から遠隔の地にあるため壁の厚い、当りのきつい防御に対する攻撃、ボールを握ってのスピードに乗ったフェント技術等国際試合の経験不足からくる〝カン〟の悪さが目立った。

キールチームからはゴールに対する執念からくるシュートのフィニッシュの強さ、フェント動作のスピード、GKの瞬発力と感の良さは学ぶべきものがあった。

全日本はミュンヘンに向ってキール戦で得たものを生かし今後猛練習により一歩々々前進し目的達成まで、けわしい道であるが責任を持って努力して行かねばならない。（日本協会オリンピック対策部長）

THW・キール来日メンバー

▽団長　G・マース（THW会長）
▽監督　H・ダーリンガー
▽マネジャー　S・シエンフエルト
▽ドクター　S・シエーバー

				cm	
GK	○R・ホイグト	(24)	会社員	176	・
	H・エールテル	(20)	軍　人	185	・
FP	D・バグーン	(33)	警　官	183	③
	◇P・プレーン	(30)	警　官	182	・
	H・モール	(24)	公労員	175	③
	P・ベルク	(28)	鉄道員	174	③
	△V・ハルプス	(25)	技　師	181	⑨
	B・ニールゼン	(29)	化学技師	198	⑨
	○G・ベルツ	(27)	学　生	181	⑧
	J・グレーパー	(21)	軍　人	185	⑥
	J・シユッツ	(21)	学　生	178	④
	K・チンマーマン	(18)	学　生	183	③

・来日メンバーはこのほか渉外役員，随行記者など4名同行
・○内数字は日本における得点数
・○印ナショナルメンバー　◇印元ナショナル　△印ナショナルB

富士クと第1戦 ダンケルセンが来日

日本協会は「GW・ダンケルセン」との日独親善試合日程、メンバーそれに第3戦の全日本の陣容（選手18名）などを次のように発表した。ダンケルセンは昨年度の西ドイツチャンピオン、今年度は西ドイツリーグ北部地区3位。

○……日　程……○

▽第1戦、4月2日15時、対富士ク（静岡・富士市富士見高校体育館）▽第2戦　4日18時30分　対大同製鋼（愛知県体育館）▽第3戦8日14時　対全日本（大阪市立中央体育館＝毎日TV中継）

○……来日メンバー……○

▽コーチ　スパヌス、マイソール（兼FP）▽GKメイヤー、○カールハー、ギーゼキング、▽FPバールラッハ、スルク、ドレッゲメイヤー、ヘールストケッター、レーゼ、シュラー、○ムンク、○ベンク、ブールメイスター、ブッシュ（身長2m）、○クラマー、リョツッケ、クロッケル。○印はミュンヘン・オリンピック候補選手

○……全　日　本……○

▽ヘッドコーチ　村田弘▽GK下里、本田、大村、馬渕▽FP近森、飯田、東、藤中、野田、中井木野、早川、有永、斉藤、氷海、大江、新実、佐々木

全日体大の善戦実らず

終盤ニールゼンの快投許す

第2戦・全日体大との試合は3月18日午後5時35分から東京・駒沢屋内球技場で行われた。審判＝安藤純光、岡前義春（ともに国際審判員）、観衆＝約千八百。

THW・キール 17（7―8 10―6）14 全日体大

【キール】	得		【全日体大】	得
ホイグト	0	GK	大村（OB）	0
エールテル	0	GK		
ニールゼン	6	FP	松岡（現役）	3
バグーン	0	FP	浅原（現役）	4
ハルプス	4	FP	小林（現役）	4
シュッツ	1	FP	氷海（OB）	0
ベルツ	0	FP	藤田（現役）	2
ベルク	1	FP	喜井（現役）	1
グレーパー	2	FP	河先（現役）	0
プレーン	0	FP	古沢（現役）	0
モール	2	FP	高野（現役）	0
チンマーマン	1	FP	細田（現役）	0
	17	（3） 7MT （2）		14

観戦記

杉山　茂（NHK運動部）

○……全日体大はいきなりマンツーマン・ディフェンスを布いて長身のキール選手を追いまわした。

体格では劣るがスタミナに自信のある全日体大、早目々々に相手をつぶしてミスを誘い得意の速攻へ結びつけようとするこの作戦は一応成功したといってよい。

立ちあがりこそ7MTやFTからの攻撃をうけてポイントを奪われたが、13分20秒速攻を小林が実らせ3―3、14分40秒松岡（全日本）が豪快なシュートを決めて4―3としたあとは先手をとりつづけ氷海（全日本）の好リードと浅原（全日本）、小林のシャープな動きで多彩な攻撃を展開、18分40秒21分20秒小林の連続ゴールで6―4としたあたりは堂々たるものだった。

○……キールの本領が発揮されたのは前半なかばすぎからだ。特に西ドイツでも定評があるという守りの強さは、リードは与えても試合の主導権までは奪われないシンのあるところを見せた。

ベルツ、ハルプスらを軸とした中央部の堅さ、FPとGKホイグトとの連けいプレーなどさすがと思わせ、全日体大は6―4、8―6、9―7と三たび3点差をつけるチャンスをつかんだのだがいずれも巧みにそのあとの攻撃を封じこまれ、逆に1点差に詰められてしまった。ここらがキャリアの差であり、本場のトップチームの"力"なのだろう。

○……後半、全日体大は2分30秒9―9に追いつかれたが、ショートパスからの変化技で先行、スタンドを沸かせた。

20分30秒キールはハルプスが強引に全日体大ディフェンスの中央を突破して13―13とこの試合8度目のタイスコアにもちこんだ。ここでベンチは後半8分から休ませていた198cmのニールゼンを繰り出しこの起用がみごとに当たった。

○…ニールゼンは22分30秒、右45度から全日体大ディフェンスがややさがり気味なのを見るといきなり投げおろすようなシュートをほおりこみ、23分40秒には正面、25分には右45度といずれも11～12mのロングシュートを決め、あっという間に16―13とスコアを開いた。

全日体大はひるまず26分40秒藤田が1点を返したが、終了30秒前モールにダメを押され善戦空しかった。

○……劣勢とみられた全日体大がファイトにあふれた攻守で試合時間の大半を優勢に進めたこともあってなかなか見応えのある試合であった。

それだけに、最後のところでニールゼンへのマークに甘さをみせ一気に勝負をつけられてしまったのは惜しまれる。

キール各選手のもつたくましさとヨーロッパチームには珍しい速攻の巧さ、冷静でクリーンな試合運びは印象的だった。

第2戦・先手をとられていたキールは後半20分30秒ハルプスの強引なシュートで追いつく（共同通信社提供）

ナッリヒテン紙 H・グッチェ記者に聞く

THW・キールに西ドイツ有数のハンドボール記者ヘルムト・グッチェ氏（キールナッハリヒテン紙）が同行して来日、編集部のインタビューで次のように語った。

▽

日本のナショナルチームは一九六九年キールで見た時より格段の進歩をしている。特に守りがよくなった。プレイヤーではGK本田がズバ抜けていた。彼はヨーロッパのどの国へ行っても第一線で活躍できるだろう。

THW・キールは一応その実力を発揮していたと思う。旅の疲れで第一戦は鋭さがなかったが全日本とはベストコンディションで対戦させてみたかった。

西ドイツ球界も金メダルをめざして必死だ。つい最近、しめ出されていたルブキングがナショナルに復帰した。我々記者団があと押しをしたのだが、彼のカムバック決定でクランツ技術委員長が辞任する一幕もあった。

このほかシュミット（グンメルスバッハ＝昨春来日）が6年連続全国リーグの得点王の偉業を逸し話題となっている。新得点王はカルレル（グロスワルスタト）だ。

THW・キールの横顔

□……一口にいってまじめなチームであった。

日航機の機体調整で来日が一日遅れ、到着翌日名古屋に移動してすぐ全日本と第一戦という強行日程にもほとんど注文をつけず、しかも試合後の記者会見では「たとえ旅の疲れがなくても、我々はこの位のスコアで全日本に敗れただろう」（ダーリンガー監督）というほど。

タイトルのかからぬ親善試合だから、といってしまえばそれまでだが謙きょなマナー、クリーンなチームプレーは日本のファンや関係者に好印象を与えたようだ。

□……本国でもキールの人気は高い。六千八百人を収容できるホームコートはいつも満員で、このところずっと観客動員数ではリーグ一の記録をもつ。

すでに今秋始まる次の全国リーグの入場券を売り出し上々の滑り出しというのだからすごい

今回の遠征は去年と今年の好成績のご褒美、市とクラブが経費をもってくれたそうだ。一試合の純益が二百万円近くあり、その台所はかなり裕福とみた。

□……クラブのメンバーは約千二百人、このうちハンドボール部員は三百人だという。来日したチームはクラブのトップクラスで、このほか19のチームを編成、ジュニアチームは昨年全国優勝している。チンマーマンはその時のエース、層の厚さがうらやましい。

試合ぶりはグンメルスバッハ（昨春来日）などとは比べものにならぬほど地味、しかしソツのない攻守でスマートさがある人気の秘密もここだろう。

□……来日直前、看板のナショナルプレイヤー・アーレンゼンが国際試合のため居残り。ベテランのゲームメーカーで物理学者の肩書きをもつストラックも夫人の出産で遠征をとりやめたため強烈な個性を感じるプレイヤーは見当らなかったが、もともと守りのチームだという。

今シーズンの西ドイツリーグでも総失点を149（14試合）におさえ1位、反面、攻撃力が今一つで下から二番目だった。

□……これまで西ドイツ選手権で3回の栄光に輝やいているが全国リーグの組織が大幅に変ったあとは今シーズンの3位が最高。ダーリンガー監督は「有望な若手が順調に育っているので来シーズンは優勝を目指して頑張る」と張り切っていた。

4月来日のGW・ダンケルセンと今季は1勝1敗。（S）

大崎、後半に疲れのぞく
目立つハルプスのたくましさ

最終戦（第3戦）大崎電気との試合は3月20日午後3時8分から東京体育館で行なわれた。審判＝嶋田新太郎、安藤純光（ともに国際審判員）、観衆＝約三千

THW・キール 22（8−9 / 14−4）13 大崎電気

得	【キール】		【大阪】	得
0	ホイグト	GK	下里	0
0	エールテル	GK	岩下	0
1	バグーン	FP	近藤	1
4	ベルツ	FP	飯田	1
2	ニールゼン	FP	近森	0
5	ハルプス	FP	東	3
4	グレーパー	FP	谷口	1
0	プレーン	FP	林	4
2	シュッツ	FP	佐藤	0
2	チンマーマン	FP	荒井	3
0	モール	FP	井上	0
2	ベルク	FP	籏野	0
22	（4）	7MT	（1）	13

▽交替選手【大】FP西村、沢田（ともに得0）

観戦記

荒川清美（日本協会理事長）

○……西ドイツ3位と全日本1位彼我の実力差を知るうえにも興味ある一戦であったし、大崎有利の期待をかけて注目した。

大崎は先行されながらも16分すぎから巧くたたみかけて4ゴールを連取、8−6としてそのまま調子の波をつかむにみえた。

しかし、そのあとすぐにFTからグレーパーに返されたのが結果的にはひびいたと思う。

キールはFTからあまり小細工せず長身者がダイレクトに射ってくるケースが

1m98のニールゼンのシュートは大崎のブロックをはずす

多い。そこを読んで大崎ディフェンスは詰めるべきだった。せっかくの2点差をこれでキープできなかった。

○……このプレーに限らず大崎はシーズンオフだったせいか個人の判断力にもう一つ欠けるところがあり、攻防両面でそれがつまらぬミス（失点）につながっていた。

そこへいくとキールはさすが基礎的な展開力に全員が富み、しかも一つのプレーに実に忠実だ。若いプレイヤーが出た場合、プレーン、ベルツ、バグーンらのベテランが巧くリードしていたのも目立った。

大崎は要の近森（全日本）がフル出場できず（注・左ヒザの負傷）それならそれで、もう少し飯田、東（ともに全日本）あたりが他の選手を動かさなければいけない。

○……後半9—9のあとキールに勝機を与えるきっかけとなったプレーも若さがでたものだ。

林がポストへバックパスを送ったのだがこれが暴投、相手の逆襲をうけ9—10とされた。林は前半18分、同じようなパスを東に送って鮮やかに成功させており自信があったのだろうが、相手が追いあげムードにのり、しかも大事な同点機とあれば、危険の多いトリッキーなパスは考えものである。

○……後半12分13—10からペースは完全にキールのものとなり、大崎はまったく元気をなくした。

なんとか傷口を広げぬ努力がここで欲しかったのだが、ほとんどノーマークでシュートを射ちこまれ、たまりかねて近森が登場した時は17—10とサキが見えていた。

○……キールは昨春来日したグンメルスバッハのスケールには及ばなかったが、バランスのとれている点ではさすが西ドイツのトップチームというだけのものはあり好印象を残した。

個々の選手ではハルプスのたくましい動きが一際目立ち、特にボールをキャッチしてからシュートを放つまでのモーションの速さはすばらしかった。この他控えGKエールテルのまじめなプレーが目についた。

ラフな傾向に流れるといわれる最近のヨーロッパハンドボール界だが、キールはどのようなケースでも必要以上にエキサイトせず、フェアなプレーに終始したのはなによりもすばらしかった。

H・ダーリンガー監督訪問

ヤングパワーを率い〝名門再建〟を目指すTHW・キールのハイン・ダーリンガー監督（49歳）は往年の名FW。〝神様〟といわれたベルンハルト・ケンパ氏とのコンビで11人制の西ドイツ黄金時代（世界選手権2連勝）を築き、一九五六年（昭31）には西ドイツナッショナルの一員として来日している。それ以来、日本のハンドボール界にも深い関心を寄せる同氏に〝16年ぶりの日本〟を聞いてみた。

——最初に来日した時と比べて日本の印象は

ダーリンガー監督 すべて変わってしまった。東京や大阪などはヨーロッパの大都会と同じようになり、日本らしい建てものなどまったくないネ。残念な気もするが、これは日本の経済力を示すものなのだろう。

16年前に会った荒川氏や的場氏（益雄氏、元日本協会常務理事）ら日本の友人たちに再会できたのは嬉しかった。

——日本チームの実力をどう感じたか。

ダ監督 3年前、キールで西独ナショナルと対戦したのを見ているので、その進歩には街の様子が変ったほど驚かなかった。

——3年前と比べてどうか

ダ監督 はるかに強くなっているアジア予選の快勝を聞いていたが、ミュンヘンでもこれならかなりやれるだろう。特に60分間スピードが落ちないことや、空間を利用したプレーは大いに参考になった。

——オリンピックで日本はベスト8に入れるだろうか

ダ監督 ミュンヘンに出場する各国を全部見ているわけではないので正確なことはいえない。予選リーグの組み合せにも左右されよう。

——日体大、大崎電気は、

ダ監督 速いプレーがいい。日体大の選手のジャンプ力も目についた。

——日体大や大崎電気は単独チームとして西ドイツの全国リーグに出れるだろうか。

ダ監督 ちょっと答えにくい（笑）もう少し考えるハンドボールをする必要があるのではいか。両試合とも後半になって我々が差をつけたのは、同じようなプレーが多すぎ展開の先が読めたからだ。パスもショルダーパスばかりだ。

——印象に残った選手は

ダ監督 全日本のGK本田だ。

——日本へのアドバイスをお願いしたい

ダ監督 ロングシューターに人材がいないと思う。もっとも日本人はあまり大きいと運動神経に欠けるのかも知れないが……。

審判員はおおむねよかった。

ソビエト、ノルウェーなど勝つ
五輪ヨーロッパ予選

ミュンヘンオリンピックヨーロッパ地域予選は3月15日から24日までの6日間スペインのバルセロナなど8都市に16ケ国が参加して行なわれソビエト、ノルウェー、ポーランド、アイスランド、スペインの5ケ国が出場権を獲得した。

これでミュンヘン大会に参加する16ケ国のうちアフリカ地域代表を除く15ケ国が出揃った。

◆予選リーグA組

アイスランド 10（5－5, 5－5）10 フィンランド
ノルウェー 29（14－0, 15－1）1 ベルギー
アイスランド 31（14－6, 17－4）10 ベルギー
ノルウェー 22（11－4, 11－5）9 フィンランド
ノルウェー 14（4－7, 10－7）14 アイスランド
フィンランド 38（21－7, 17－8）15 ベルギー

この結果、ノルウェー、アイスランドが代表決定リーグ戦に進出

フランス、オランダ敗れる

▽同B組

オーストリア 20（9－9, 11－10）19 フランス
オランダ 16（10－5, 6－5）10 ブルガリア
オーストリア 13（8－5, 5－4）9 オランダ
ブルガリア 12（3－6, 9－4）10 フランス
ブルガリア 15（9－7, 6－4）11 オーストリア
フランス 16（9－9, 7－3）12 オランダ

この結果、オーストリア、ブルガリアが代表決定リーグ戦に進出両国の順位は、①オーストリア（得失点差1）②ブルガリア（0）

▽同C組

スイス 17（8－9, 9－7）16 ルクセンブルグ
スペイン 40（24－2, 16－3）5 イギリス
スイス 37（21－2, 16－0）2 イギリス
スペイン 30（16－10, 14－7）17 ルクセンブルグ
スペイン 19（8－7, 11－5）12 スイス
ルクセンブルグ 37（21－6, 16－6）12 イギリス

この結果、スペイン、スイスが代表決定リーグ戦に進出。

▽同D組

ソビエト 23（13－4, 10－2）6 ポルトガル
ポーランド 39（20－7, 19－7）14 イタリア
ポーランド 29（17－6, 12－3）9 ポルトガル
ソビエト 37（15－5, 22－5）10 イタリア
ポルトガル 23（12－10, 11－3）13 イタリア
ソビエト 17（8－6, 9－7）13 ポーランド

この結果、ソビエト、ポーランドが代表決定リーグ戦に進出。

アイスランド、ポーランドも
5番目の座にスペイン

◆代表決定リーグ1組

ノルウェー 17（10－7, 7－4）11 ブルガリア
アイスランド 25（13－11, 12－8）19 オーストリア
ノルウェー 19（10－6, 9－3）9 オーストリア
アイスランド 19（11－5, 8－5）10 ブルガリア

ノルウェー×アイスランド、ブルガリア×オーストリアの両試合は予選リーグの記録を適用。

【順位】①ノルウェー勝ち点5点（得失点差16）②アイスランド5点（15）③ブルガリア2点④オーストリア0点、この結果**ノルウェー、アイスランド**が代表権を獲得。

▽同2組

ポーランド 21（10－8, 11－8）16 スペイン
ソビエト 22（12－7, 10－5）12 スイス
ポーランド 18（12－7, 6－6）13 スイス
ソビエト 22（11－10, 11－5）15 スペイン

スペイン×スイス、ソビエト×ポーランドの両試合は予選リーグの記録を適用。

【順位】①ソビエト勝ち点6点②ポーランド4点③スペイン2点④スイス0点。この結果**ソビエト、ポーランド**が代表権を獲得。

◆第5代表決定戦

スペイン 18（7－10, 11－5）15 ブルガリア

この結果**スペイン**が代表権を獲得。

なお、失格国による順位決定戦の結果この大会の7位以下16位までの順位は次のとおりとなった。

⑦スイス⑧オーストリア⑨フランス⑩ルクセンブルグ⑪フインランド⑫ポルトガル⑬オランダ⑭イタリア⑮ベルギー⑯イギリス。

また代表権獲得5ケ国による対戦の結果、ソビエトがノルウェーを15－14で破り1位となった。

光嶋氏の試合写真
――西独誌の表紙飾る――

本誌にも毎月のようにすばらしい試合写真と原稿を寄せていただいている大阪・光嶋磯雄氏（40歳日体大出、府立八尾高教諭、大阪協会審判部長）のアジア予選を題材にした作品が西ドイツの専門誌「週刊ハンドボール」1月12日号の表紙を飾った。＝左掲

親交のある国際的なハンドボール写真記者ハンス・アプフェル氏（西ドイツ）へアジア予選のスナップを送ったところアプフェル氏が権威ある同誌に推せんしたもの

韓国戦（11月20日・大阪）で野田が射ちこむ迫力に満ちたシーンだ。このほか31頁にも6枚の傑作が並び光嶋氏の略歴などを紹介している。

光嶋氏はかつての全日本代表（GK）、大阪イーグルスをホームクラブに最近まで国内の第一線にあった。ハンドボール写真に凝りはじめたのは10年ほど前。すでに二千枚近く撮りまくり、将来は8㎜も手がけたいという。

ビッグゲームとあればカメラを片手に東に西にとび歩く光嶋氏はまったくのハンドボールの虫だ。

めったに外国の作品を載せぬ西ドイツ誌の表紙――光嶋氏の〝国際進出〟に大きな拍手をおくりたい。

「単独国際交流規程」を施行

日本協会は本誌既報のとおり2月の全国評議員会と全国理事会で懸案の「日本ハンドボール協会単独国際交流規程」を異議なく採決、47年4月1日から施行する。
これで日本協会は「日本協会規約」のほか5規程1規則をもつことになった。

〔前文〕 本程規を「日本ハンドボール協会単独国際交流規程」と呼ぶ。

日本ハンドボール協会は各都道府県協会、各加盟団体（以上いずれも下部組織を含む）及び日本ハンドボール協会登録チームが個々に国際交流を行うことを承認する

ただし実施にあたっては次の各項を守らなければならない。

〔1〕 外国遠征

イ、出発予定日の6ケ月前に日本ハンドボール協会あて次の内容の企画書を提出する。ただし東南アジア地区への遠征は3ケ月前とする。

遠征チーム名、渡航先、渡航期間、相手国交渉先、予定試合数、渡航理由、遠征メンバー、責任者名、渡航経費の負担者

ロ、企画・提出後3ケ月経過の時点で日本ハンドボール協会あて企画中間報告書を提出する。

ただし、東南アジア地区については1ケ月経過時点とする。

〔2〕 外国チーム招待

イ、招待予定日の6ケ月前に日本ハンドボール協会あて次の内容の企画書を提出する。

招待チーム名、招待期間、相手交渉先、予定される日本での日程来日メンバー、招待理由、招待責任者名、後援者名、招待経費の負担者（招待条件を含む）、日本における身許保証者

ロ、企画書提出後3ケ月経過、1ケ月経過の2回の時点で日本ハンドボール協会あて企画中間報告書を提出する。

ハ、実施される試合の審判員は日本ハンドボール協会の推せんによるものとする。

〔3〕 日本ハンドボール協会は提出された企画書に対し次の場合に企画の停止、延期、再検討を勧告することができる。

イ、日本政府が国交していない国のチームとの交流

ロ、国際ハンドボール連盟未加盟国のチームの交流

ハ、非アマチュアチームとの交流

ニ、企画書および企画内容を不完全と判断した時

ホ、提出された企画内容が日本ハンドボール協会にとって不利益なものと予測される時

〔4〕 日本ハンドボール協会は本規程に基く国際交流については一切経費の負担は行なわない。また企画実施中に生じたトラブル、傷害についても一切責任を持たない

〔5〕 原則として企画終了後1ケ月以内に日本ハンドボール協会あて報告書を提出する。

〔6〕 日本協会に登録された「個人」のうち1人以上4人までが個人の資格で海外ハンドボール研究、指導、試合、トレーニングなどに行く場合については特に拘束しない。

ただし第3項に触れる場合には予め日本ハンドボール協会に届出て指示をあおぐこととする。

〔7〕 前ぶれなく来日した外国チームとの交流などについてはその都度原則として日本協会常務理事会が審議する。

〔8〕 本規程に違反した場合は日本ハンドボール協会懲罰委員会の裁決による。

〔9〕 本規程は昭和47年4月1日から施行する。

〔附則〕 イ、正式復帰までの沖縄チーム招待および沖縄遠征についてはこの規程に準じる。

「登録規程」を一部変更

日本協会は2月の全国会議（評議員会・理事会）で加盟金、登録金などの値上げを決めたが（＝本誌既報）それにともなって「日本協会登録規程」の一部を次のように改正した。

※

第4条（個人の登録）一般の部（男女）の個人登録はチーム所在地現住所、勤務地、通学先などの区別なく一人が3チームまで重複登録することが出来る。一般の部、学生の部に登録される個人は登録金を必要とする。

第7条（個人の追加登録）個人の追加登録は認められる。ただし追加登録金を添え遅くとも競技会申込み締切日までに手続きを完了した場合に限る。なお、高校チームに登録する生徒は追加登録金を必要としない。

※

＜編集部・注＞「単独国際交流規程」の新設は各国協会レベル以外での事業がいっそう盛んになることを予想してタイムリーな施策といえる。この分野に関しては斯界は閉鎖的なムードが濃かったのだが、新規程の施行でむしろ積極化されそうだ。同時に国際交流といえば必ず日本協会が表面に立っていたわずらわしさも軽減される。将来はこの規程も必要なくなろう

「登録規程」の改正は、学生チームからも個人登録料（一人百円）を徴収する点が主なものだ。

190万円の純益を予想
オリンピック予選協賛事業

日本協会がアジア予選（昨秋11月、東京ほか）の運営費を補うために行った協賛事業の結果がほぼまとまり、同事業を管理した資金委員会（委員長・嶋田常務理事）から中間報告（2月末現在）された。

それによると同委が全国に頒布した記念バッヂ、同ネクタイピン特製バッヂの三品計二万二千個の94％が消化され、純益は百九十万円近くあがりそうである。

当初、純益目標額は百八十万円におかれていたが、頒布期間が短かいことなどもあり達成に不安の声も聞こえていた。しかし全国の理解と協力は大きな実りをあげ、日本代表の快勝も手伝って順調に捌かれたようだ。

日本協会ではこの中間報告とともに改めて全国各位に感謝の意を表明している。正式な決算報告は頒布金の受納がすみしだい行われる予定である。（注・2月7日現在、純益高七四九、七〇〇円、未収金一、一七八、六〇〇円）

オリンピック日本ハンドボール応援団の募集

8月26日からミュンヘンで開かれる第20回オリンピック。ハンドボールはベルリン大会以来36年ぶりに実施され日本も宿願の初出場を果たすが8月29日から9月4日まで（予定）ミュンヘンでハンドボール競技を観戦、日本代表を応援する計画が進められている。

経費はヨーロッパ各地見学（全行程20日間）を含め三八五、〇〇〇円（但し入場券・旅券代、注射代その他個人的費用は含まず）で、人員は40名限り（先着）。

申しこみ、問合せは名古屋市千種区豊年町3の37、タヨシ産業・田中滋章氏（全日本実連理事長）。〔電〕〇五二（731）一四四六。

全日本学生は11月13日から
6月に男女日韓交流

全日本学連は3月20日東京で全国理事会（全国学連代表者会議）を開き、メインエベントである第15回（女子第8回）全日本学生選手権の会期を11月13日から17日まで大阪市中央体育館に内定した。

また、第6回日韓学生交流として韓国学生男女代表を招き6月10日から19日までの9日間男女各4〜5試合の予定で準備を進めるよう申し合わせた。いずれも正式発表は4月の新役員選出後に行なわれる。

なお、日本協会を通じて今夏来日の希望を寄せていたパリ大学男女は受け入れ態勢が充分でなくことわることになった。

席上、日本協会への納入金増額が話題となり、学連をはじめ底辺への還元を日本協会が積極的に考慮するよう申し入れることにした。

各学連の現況報告では関東が今春から5部制（男子）を布くことを明きらかにした。

愛知教員クが台湾遠征　愛知教員クは3月25日から29日まで初の台湾遠征を行い、台北、高雄などを転戦、4戦4勝した。

なお、3月30日、日本遠征に向かうGW・ダンケルセン（西ドイツ）が台北に立ち寄り地元選抜と対戦、38－17で勝った。

事務局の住所変更　新潟・茨城両協会の事務局所在地が次のように変わった。

▽新潟　柏崎市東本町1の6の8「佐渡五」旅館気付

▽茨城　水戸市東原3丁目水戸市立第一中学　住谷稔気付

女子世界選手権 遠征レポート (2)

世界選手権をふり返って

寺尾由美子

今回の世界選手権大会は女子にとって六年ぶりの海外遠征ということで、ハンドボール関係者の期待を一身に集めて私達は十一月に日本を離れました。

外国選手になれるということで大会迄の一ケ月間をデンマーク、スウェーデン、ルーマニア、フランス、ドイツを回り各国で三〜四の親善試合を消化し、十二勝二敗という好成績でオランダ入りをし本大会に臨んだのですが、御期待に添うことが出来なかったことを非常に残念に思います。

大会を終えて改めて世界選手権大会とは厳しいものだと痛感させられ又、私達の想像以上に国と国との戦いには激しいものがありました。

日本人と外人との一番の違いは技術というよりパワーの差だと思いました。しかし大切なことはいつどんな時にでも自分の力を十分発揮出来ることだと思います。

外国選手はこの様な大きな大切な試合の時でも自分達の試合の前の試合を最後まで観戦しその後10分位体を動かしてすぐ試合に臨みます。それでもレディーピーと同時に10の力を発揮します。

日本の様にアップが少なければ試合が始まってもしばらくは調子が出ないというのではありませんそれは一日一、二時間の週二、三回という少ない練習量からくる練習方法の違いの現われだと思いますが、やはり私達も自分のコンディションをよく知り短時間でも自分なりに仕上げるという事を習慣づけたいものです。

外国選手は個人技に走らずチームプレーに徹しています。

各自が自分のポジションの役割をよく知っており確実にその役割を果たしております。

だから、少しでも無理だと思われるシュートは絶対打たないで、より確実なところへとボールを回し確実に得点するといった攻撃方法でした。

又見逃せないことの一つにゲーム運びのうまさがあります。

例えば自分のチームがリードしている時の時間のかせぎ方とか、反則が行なわれた時のボールの扱い方など……。

防御面で目についたのは、何といってもフットワークのよさでした。欧州では中学生、高校生、一般とはず一時間中フットワークで動いています。

それがごく自然に行なわれているのです。

背の低い私達が長身の外人に相対するには個々のディフェンスの範囲を広げることとの出来るフットワークが最も大切な事だと思いました。

最後に、年齢的に日本と比較してみますと欧州はすごく幅が広いです。ナショナルプレーヤーだけをみましても、日本の二十一歳から二十四歳に対して、欧州では十八歳から三十歳すぎにまで及びます。実際に二十七〜八歳で一人、二人の子供のいるママさん選手やナショナル経験十数年のキャリアをもつ三十歳すぎのプレーヤーが第一線で活躍しております。

練習量とか年齢層については、私達はただ驚くばかりでした。

こうして二ケ月にわたる遠征も終り、いろいろと勉強させられました。実際に見たり、勉強して来ましたことをこれからのハンドボールに役立たせたいと思っております。

（FP・大崎電気）

初めて本場の技術に接して

三毛　直子

ヨーロッパ遠征から帰り一ケ月半たちました。二ケ月もの長い間欧州の技術に接していろいろ学ぶことができました。最初の訪問国デンマークは勿論未知の土地でありその上初めての外人選手との試合ですので、何をするにも不安が先走り思うように試合を運ぶことができず相手の長身を生かした攻撃に相当苦戦をしましたが、後半はかたさがほぐれ私達のスピードの方が一枚上で勝ちつづけることができました。三ケ国目の親善国ルーマニアでは二敗してしまいましたが、ルーマニアトレーナーのブリエルさんに日本チームの弱点とするデフェンスについて詳しく指導してもらいました。特にシューターに対するデフェンスの詰めとポストプレーヤーのつぶしな

☆ 女子欧州レポート

どことこまかに説明してもらいました。このようにルーマニアや各国で学んだ事を頭に入れて本大会開催地、オランダ入りをしました。ここでは、大会前にユーゴスラビアと練習試合をしましたが、ユーゴチームは身長に関係なく誰もがどのポジションでもこなせるオールラウンドプレーヤーを理想としていることを学ぶことができました。低い人はポスト、高い人はロングシュートとだいたい決められている日本の考え方とは大分異なっていると思いました。いよいよ大会を迎え本当の欧州技術を自分の目で確かめる事ができました。特に勉強になったのは、手足の使用です。絶えずボクシングスタイルで体を動かし、デフェンス六人のコンビネーションの良さはすばらしいものがあり私達はポストプレーを行なう余地がほとんどありませんでした。手の使用においてもヤニの利用が上手なせいか自由自在にプレーをすることができ、動きながらのパス、視野外の走りなど多種多様な攻撃をしてきます。どこの国のポストプレーヤーでもシュートに対する執念深さは実にすばらしいものです。必ず7mに結びつけております。このように外人選手のプレーは目をみはるものがたくさんありますが、ただスピードある速攻にはかけているように感じました。やはり身長の差がある以上日本チームとしてはスピードで相手を惑わし、すばしっこいプレーをしてこそ通じると思います。私達は大会ではよい成績を収める事はできませんでしたけれど、少しも引けをとらなかったように思います。その敗因は、結局プレーではなく精神面だけだと痛感しました。この二ケ月の欧州遠征で私の頭にもっとも強く残ったことは、

一、試合に対する駆引の巧妙さ
二、ボディコントロールの利用のうまさ
三、やろうとする根性とねばり

以上の三つであります。この二ケ月間の遠征で体得した数々の事がらを活かし、今後の練習に精魂を傾け最善を尽して頑張りたいと思います。最後にこの欧州遠征にいろいろお世話下さいました方々に深く感謝致します。

（FP・田村紡）

スウェーデンでの試合と生活

渡辺須和子

11月5日　夜スウェーデン（ボーレンゲ）着

日本を離れてまだ3日目、長時間の飛行機の旅、デンマークからスウェーデンと、異国での生活環境・習慣等、異った面ばかりで、気持の落ち着く暇もなく、スケージュルも強行軍であった。夜から降り出した雪も、翌朝は積雪20cmを越し、辺り一面真白、銀世界の素晴らしさは、熊本育ちの私達から見ると、年に1〜2回降っても積る事のない雪を踏みしめたのがスウェーデンとあって、すごく印象的でした。町中がきれいに整備され、塵一つ無く、家々の広い庭には芝が植られ、出窓にはかならずと言っていい程花が飾ってあり気持よく感じました。人々の性格もノンビリして他人に関心を持たず、自由に生きているといった感じです。隣りとの境は何処で区切られているかわからない程、見渡す限りの土地、牧場には人影もなく、狭い所でひしめきあう日本を考えますと夢の様です。

ここでは2試合行ない、11月6日、クラブチームとゲーム　19（12−7／7−4）11　11点の失点中7本の7メートルを許した事は問題だ!! 11月7日、早朝ホテル出発、次のゲーム地、ストックフォルム迄約3時間30分のバスの旅。午前中市内観光（美術館、博物館、オペラ劇場）午後クラブチームとゲーム　20（10−3／10−8）11　この日も7メートル6本のポイントを許す。私達にとっては、2ゲームで13本

7位決定リーグ　日本—ノルウェー戦

☆ 女子欧州レポート

の7メートルを与えた事で、特にディフェンスの強化を痛切に感じました。外国選手は、日本人選手に比べて身長、スタミナがあり、ボールを握ってのパスプレーが上手で、パスモーションからシュート、バックパス、フックパスを容易に使っていた。私達のディフェンスで最も悪かった所は、相手がジャンプシュートする場合スピードがあり守りながらも押されゴールラインを踏む、また、ポストにパスが入るとそのままボールを握り中に飛び込む為、後ろから引っかけるような形になる。〃即〃7メートルの判定。相手のカットインに対し故意に手で突いたり、ホールディングすると警告または警告無しの退場である。こういった点については、日本の審判判定と相当な違いがあると思われます。やはり国際経験の少ない私達にとって、自分の身体でぶつかり身につけなくては……。それにはまず第一に、早く外国選手に慣れる事であり、国際試合がどんなものかを覚えなければならない。私達に与えられた課題は、一、ディフェンスの強化だけ。二、常に足を動かし軽いボクシングステップを踏む事。三、ポストプレイヤーを横に置かず、自分の背後に位置させ片方の手はかならず相手にタッチしておく事。今後の目標は7メートルスローを出来るだけ少なくして行く等々。しかし攻撃面に於ては、日本の技術がはるかに上で、動き、パスワークにしても相手チームに感嘆させる場面も多く、相手から学び取るものは余りなかったと思います。これを機会に、近い将来日本が世界に挑戦する時期がくると思いますが、自己の持つプレーに益々みがきをかけ、頑張り度いと思います。

（FP・大洋デパート）

写真はいずれも7位決定リーグ，日本—ノルウェー戦から

デンマークでの試合と生活

垂水　秀代

日本を発って一七時間、初めての異国コペンハーゲンにと着く。汽車の旅は慣れているとは言え陸と空とでは勝手が違う長い旅、そして時差の関係で朝昼夜のめまぐるしい変化、それにともなっての数度の食事、初めの内こそ喜こんで食べていたがその内に食欲もなくなり食事恐怖症となる。ようやくの事で着いた空港は朝の七時、パスポート等の手続で一時間かかりデンマークハンドボール協会廻しのバスにと乗るが八時と云うのに外は薄暗く北国特有のどんより

芸術的だった日本

～世界選手権後記（ＩＨＦ公報）～

東ドイツ完ぺきの心技誇る

国際ハンドボール連盟（ＩＨＦ）は第４回世界女子選手権の総評をＩＨＦ公報第92号で大要次のように述べている。

（久田　暁）

▽

第４回世界女子室内選手権はＩＨＦ副会長アルベルト・サンローマン氏の提唱によって、世界でもっとも美しい国の一つであるオランダにおいて、世界一流の女子プレイヤーを集めて開かれた。

美しい国で行なわれた大会のなかで最も優美であったのは日本であった。それは桜の花の美しさにも似て、彼女らはルールにきわめて忠実な模範的なプレーを示してくれた。

ヨーロッパ各国は身体的接触の多いラフなプレーと意図的な反則によって試合を進める悪い傾向が目立ち、しかも嘆くべきはそうしたプレーが試合の勝敗を支配していたことである。

全世界のハンドボール関係者が女子ハンドボールを女性のスポーツとして発展させたいと思うならば、この傾向は明らかにマイナスである。

なるほど強豪チーム同士の試合はスリリングであり、作戦面技術面に関する限り非常に高いレベルであった。しかし芸術的でフェアなハンドボールを行なっていたのは日本だけだったのである。

ヨーロッパ各国もスピードとパスプレーを多くしたハンドボールを行なおうと努力をしていなかったわけではないが、少くとも日本のように女子のハンドボールの女性的魅力を発揮させるまでにはいたらなかった。

新しく世界の女王となった東ドイツはすばらしいチームであり、技術的にも身体的にも完全なコンディションであった。速くてダイナミックなハンドボールを得意とし、強い意志力、完ぺきなハンドリングはチャンピオンと呼ぶにふさわしい実力を誇った。

ルーマニア対ハンガリー、西ドイツ対デンマーク戦が延長にもつれこんだのをはじめ各国、各試合がほとんど実力伯仲していたことは男子と同じように、一流チームが多くなったことを示している。喜ばしい。

東ドイツ、ユーゴ、ハンガリー、ルーマニア。それに予選で敗れオランダに来られなかったもののソビエトとチェコ。この６ケ国の実力は抜群で現代のベストチームといえよう。

緊張、ドラマチックな瞬間、心理的なかけひきは、そうした展開を望み期待した多くの観衆を充分に満足させたであろう。いくつかの番狂せを折りこみながら、トップレベルの充実を裏づけた申し分ない大会であった。

プレスの選んだベストセブン＝▽ＧＫツーバ（東独）▽ＦＰホクムス、クレスマ（東独）スタービンスキー、スジク（ハンガリー）ベルコイアーヌ（ルーマニア）クネセビク（ユーゴ）

した天候、それも陽が昇るにつれて沿道の木々の紅葉、四角て赤いレンガの屋根等が広々とした田園風景によく溶け込み明るい世界へと変化する。そうしている内に最初のゲームの地コルーリンに着き疲れを取る間もなく数時間後にゲーム、着いたらすぐゲームと言う事は覚悟していたものの日本を出る時に言われた事が早くも実現、第一戦目のデンマークではナショナルチームだから大差で負けるだろう……と色々な不安もあったがデンマークとはオランダでの世界選手権で顔を合わせると言う事も重なりどの選手の顔にも緊張感とファイトが見られる。八時に試合開始旅の疲れで体が重いか……と思っていたが以外と軽くそれまで大きい大きいと思われた相手の上背さえも余り気にならず前半６：６、後半８：６の計14対12で勝つ。７メータスローを日本でのゲーム以上に取られた事には驚ろく。日本人の場合相手と比べてみるとどうしても小さくポストにおいても後ろに少しでも廻られたら必らずと云っていい程７メータスロー。翌日のゲーム前の注意事項は昨日の反省として７メーターを三本以内に押えると云う事だったがこのゲームでも六本も許すと云う事になり勝つ事は勝ったが約束事が守

られない結果となった。

攻撃面の場合は小さい事を逆に利用してプレー出来るがバックに於ては少しでも大きく見せるように手の位置などを考え早目にボールをつぶし常にフットワークで足を動かし瞬間的にも自由に動けるように心がけておく事が必要だろう。このゲームでの7メータはここを振り出しに本番に望む私達にとりよい教訓となった。翌日は船でコペンハーゲンに渡り人魚の像をみたりするがゲームゲームでうるおいのなかった気持の中にアンデルセンの童話が浮かび誰を待つのか淋しく海をみつめている人魚の姿がいじらしくまた可憐にもみえ、見ている私達を思わず童話の世界へと誘い込む。きれいな街いたるところの青銅の造り物、そして海辺の人魚の像、デンマークは伝説と童話の国でもありました

（FP　大洋デパート）

ルーマニアでの試合と生活

米　恵美子

デンマーク、スウェーデンでの日程を消化し私達にとって、ハンドボール技術、生活面において興味深い共産国のルーマニアに入った。この国での八日間の生活は、予想以上に私達に深い印象を残してくれた。十一月八日、朝早く、ストックホルムに別れをつげ、同日五時十分にブカレスト空港に到着、デンマーク、スウェーデンでは短かい日程で各地を転戦し、移動の連続で落ち着く間もない強行スケジュールの毎日だったが、この国では首都ブカレストの同じホテルに八日間滞在することになりやっと腰を落ち着け国柄やこの国の生活様子を知ることができた。ここでは、遠征初めての自由行動も許され、小人数にグループを組み買物や観光に出かけた。ブカレスト市内を歩きながら町行く人々の服装、店先のウインドーに並ぶ旧式の電気製品、世界の流行からはるかにとり残されたファッション、町並の古い建物、それらがすり減った石畳の道路にマッチし想象した共産国のイメージそのままでした。数少ない近代建築の幾つかは軍事関係の建物や大学、ホテルなどの他わずかしか見られず物質面の不足に伴い近代化の遅れが強く感じられた。また各商店は国営であるためか商品を積極的に売ろうとする意欲がほとんど見られず商売熱心な日本から見るとその無気力さは、腹立たしい程でした。しかし国民性は明るく人なつこい人達で陽気で派手なゼスチャーでの会話等面白く感じました。試合、練習のあいまに少ない時間ではあったが余暇を観光の時間に当てられ、ブカレスト市内をバスで遊覧したり、まためずらしい民芸品やルーマニアの古い農家を集めてある農村博物館なども見物することができ、昔のルーマニアの生活をうかがうことができた。十一月十日、ルーマニアでの第一戦サラフロレスカ体育館で試合が開始された。ブカレスト大学チームは二名のナショナルプレイヤーを含み、これまでに対戦してきた相手よりは攻守においてさすがに力強く特に速い動きと二人や三人のコンビが随所に見られ、シュートモーションからの巧みなショートパスはこれまでの試合になくディフェンスに神経をすりへらした。また七本の7mスローをとられ六点を失うなどデンマーク、スウェーデンに引き続き再びレフェリーの判定にとまどった。後半追い上げややペースをとりもどしたが前半の四点差が後半にも尾を引きでついに追いつくことができずに終ってしまった。

ルーマニアでの第二戦は十三日同体育館でナショナルチームと対戦した。18－12と前試合に引き続き敗れはしたがこのチームは世界選手権出場チームの上位にリストアップされているだけにルーマニアチームの胸をかり日本の力を思い切りためすことができた。ナショナルチームも前チームと同様ディフェンスでは早いつぶしと早いアタックを多用し荒いディフェンスが特に目立った。この試合では前試合に比べ7mスローを二本（一得点）に押えることができたのは、ルーマニアで学んだディフェンス練習の成果だったと思う。十一月十五日ルーマニアでの日程を予定通り消化しルーマニアでの思い出を胸いっぱいにつめ次の目的地フランスへ機上の人となった。

（FP・大洋デパート）

フランスでの試合と生活

島田　夏枝

十一月十六日、ルーマニアよりフランスに着く。世界の流行をつくるおしゃれの街パリ、パリは人々のあこがれの地、もちろん、若い私達が一番楽しみにしていた所だ。

マロニエ並木の続くシャンゼリーゼ通りや凱旋門、エッフェル塔など、その期待どうりに素晴しいものだった。なかでもルイ十四世

が二十年の歳月を費やして築いたと言われるベルサイユ宮殿の豪華さ、その内部の「鏡の門」は金や銀をふんだんに使った絢爛豪華な部屋で、その見事さにすっかり圧倒されてしまった。

フランス人は母国語をすごく大切にすると聞く。その流調な発音は世界一だと自負し、他国語をあまり受付けず、世界のトップをいく観光都市にもかかわらず、ルーマニア以上に英語が通じなかったのは意外だった。

ここでは、予定どうり四試合を消化した。通算七試合目、フランスでの第一試合は、十七日パリより汽車にて四時間の、ボルドースポーツホールにて行なわれた。

又、第二戦は十九日、ボルドー市より更に汽車で一時間の、アングレーム市にて行なわれる。

二チーム共、クラブチームで、日本の強いアタックのディフェンスに面くらった様子で、自滅が多く、日本はそれを速攻に持ち込み速攻を中心に、コンスタントに得点を重ねる事が出来た。

第三・四戦は、いずれもフランスナショナルチームと行なう。

第三戦は、クラブチームとナショナルチームのちがいを考えず、雑な立ち上がりをしてしまい苦戦した。ルーマニアで習った、強いアタックと、早目に相手の攻撃の芽をつむ、これが出来ずに、失点が続き、それからオフェンスの歯車まで狂ってしまい、結局少差で振り切ったものの、最後まで、コンビネーションプレーは出ず、個人プレーに終始した試合展開に終る。

この四戦で一番とまどったのは審判の、オーバーステップの判定基準が、日本より二歩くらい早い感じで取られた事だ。ワンフェント後、二歩目でドリブルをついたと思うのだが、これは、ほとんどオーバーステップに取られた。

又、チームの課題であったディフェンスだが、前にやった六試合の失点の過半数が7mスローであった事から、出来るだけ7mスローを取られないようにとの注意があったにもかかわらず、ここでもライン内防禦の7mスローを取られてしまった。体の少さい私達はキープカのある彼女達にどうしても、体ごとエリア中に押し込まれてしまうのだ。これは手の使い方や、フットワークの方法、又、ポストの置き方など、今後研究する必要があると思う。

四試合全勝、幾つかの問題点も出たが、多くの成果を上げ、フランスでの全日程を、無事に終える事が出来た。

（FP・大洋デパート）

（注）本文中の試合写真はいずれもハンドボール写真家H・アプフェル氏（西ドイツ）から光嶋磯雄氏（大阪）へ送られて来たものを借用しました。

日本ハンドボール協会　女子ナショナルプレイヤーリスト

（ABC順・本誌調べ）

▽FP（39名）

氏名（所属）	試合数	得点
青木　悠子（愛知紡）	7	0
枝尾　清女（大洋デパート）	8	3
深津久仁子（大崎電気）	1	0
早川　清美（大崎電気）	8	17
蓮見二三恵（三菱鉛筆）	※	
長谷川邦子（田村紡）	※	
磯部　昌子（愛知紡）	7	11
笠原喜代子（大崎電気）	8	7
加藤　井子（大崎電気）	8	0
黒川　泰恵（大崎電気）	15	8
久蓮松美和子（大洋デパート）	8	2
小林　五子（田村紡）	※	
古佐原ひろ子（東京重機）	8	2
牧野　涼子（東京重機）	8	11
三毛　直子（田村紡）	7	3
三浦　朝子（大崎電気）	4	0
三宅美智子（大洋デパート）	7	0
水谷　秀子（田村紡）	※	
永井　昭子（大崎電気）	8	5
新保いく子（大洋デパート）	8	2
西村八千代（大洋デパート）	6	13
太田美紀子（レナウン工学）	6	1
沢田　勝子（愛知紡）	7	8
清水　一子（田村紡）	※	
島田　夏枝（大洋デパート）	8	14
鈴木　功子（大崎電気）	8	14
高山やよい（大洋デパート）	2	0
竹本千恵子（レナウン工業）	2	0
滝口　治代（東京重機）	6	0
田村うた子（大崎電気）	6	4
種村　好子（田村紡）	※	
垂水　秀代（大洋デパート）	8	31
塚原　米子（愛知紡）	3	0
寺尾由美子（大崎電気）	3	0
宇井　敬子（大崎電気）	15	21
渡辺須和子（大洋デパート）	6	25
渡辺　好子（田村紡）	※	
山崎　鉒子（愛知紡）	7	1
米　恵美子（大洋デパート）	8	2

▽GK（7名）

氏名（所属）	試合数	得点
古谷　芳枝（大崎電気）	11	0
川崎　幸子（大崎電気）	8	0
北岡　千賀（愛知教育ク）	8	0
小原　名苗（大洋デパート）	8	0
篠崎　益野（愛知紡）	6	0
渡辺美智子（田村紡）	※	
山田　帆浪（レナウン工業）	6	0

・試合数は公式国際試合のみ
・※印は流会した1968年の世界選手権代表
・所属は選出当時
・いずれも7人制

★海外トピックス★

ブジエロバール悲願を達成
〜男子ヨーロッパ杯〜

ヨーロッパ22ケ国の一九七〇〜一九七一年度チャンピオンによる第12回男子ヨーロッパカップトーナメントは昨秋9月から約6ケ月にわたって各地で熱戦をつづけていたが、2月19日西ドイツのウエストファーレンホールで行なわれた決勝は既報のとおりHC・パルチザン・ブジエロバル（ユーゴ）が3連勝を狙うグンメルスバッハ（西ドイツ、昨春来日）を破って初優勝、ユーゴに初めて栄冠をもたらした。同チームは第4回（一九六三）にいちど決勝まで進んでおり10年目の宿願達成、クラブ創立は一九五五年。主力のホルバトヴィドビックら7人のナショナルプレイヤーをかかえている。

パルチザン・ブジエロバル（ユーゴ）19（10−5、9−9）14 グンメルスバッハ（西ドイツ）

【グンメルスバッハ】	得
※カーター	0
ウフェル	2
ザライ	0
ライステ	0
※フェルドホフ	0
※シュミット	5
※ベステベ	0
※J・ブラント	3
ケラー	1
シュラフェック	3
ブランシュバアイク	0
(0)	14

【ブジェロバル】	得	
ブラディク	0	GK
ニム	0	GK
※ホルバト	4	FP
プロダニク	0	FP
※ヴィドビック	3	FP
※ヤクセコビク	2	FP
※ヤンドロコビック	2	FP
※デュラネック	0	FP
※スミルヤニク	3	FP
ミルノビク	0	FP
※プリバニク	5	FP
ペシナ	0	FP
7MT (4)	19	

※印はナショナルプレイヤー

王者・ルーマニアの近況

世界チャンピオン・ルーマニアはミュンヘンでの金メダルを狙って着々と準備を進めているが、今シーズンはまだ国際大会ではノンタイトルである。

地元で開いたカルパティア・カップ、スウェーデンにおけるワールド・カップともにユーゴに次いで2位に終っており（本誌既報）単発の国際試合でも、あまり会心の勝利を得てはいない感じだ。

しかし、多彩な攻守と地力はやはり群を抜く、といろみかたは強く、オリンピックまでの調整ぶりが注目されている。なおルーマニアは一九三六年のベルリンオリンピック（11人制）では第5位である。最近発表されたオリンピック候補選手は次のとおり。

▽GKペヌ（ディナモ・ブカレスト）、オルバン（ステアウア・ブカレスト）

▽FPグルイア、キシド、バートロム、ストックル、ガツ（以上ステアウア・ブカレスト）、ボタ、サムンギ、D・マリン、リク（ディナモ・ブカレスト）、ステフ、ボアネア、コスマ（ブカレスト大学）、ツドジェ、ショーベル（クルージュ大学）、グネス（ポリテクニック・ティミソアラ）

【訂正】本誌95号26頁「西ドイツ選手権」の項でFA・ギョッピンゲンを初優勝としましたが誤り、2年ぶり2度目の優勝と訂正します。

“日本、スポーツの本質を理解”
ホルル氏、アジア予選評で絶讃

昨秋のアジア予選に国際ハンドボール連盟（IHF）代表として来日した同連盟技術委員長エミール・ホルル氏（スイス）は近着のIHF公報に次のような「アジア予選印象記」を寄稿している。（久田暁・国際担当常務理事）

日本の堂々たる勝利であった。日本は秀れた条件を備えてミュンヘンを目指すアジアの代表にふさわしいチームである。

日本はミュンヘンにおいて非常に魅力的なチームとして登場してくるであろう。

彼らの戦術的な理解度、彼らのハンドボール能力、彼らの完全なる競技コンディション、彼らのスピードと敏しょう性はすばらしい。

日本にこうした特色がある限り充分にヨーロッパ各国の“対抗者”としての価値を認めなければならない。

日本の特色をもう少し説明しておこう。彼らの顕著な特徴は「すべてのプレイヤーがほとんど等しく機能を備えていること」だ。

たった一つの不利な点は彼らの中に強力な長身者がいないことであろうか。

しかしながら彼らの優雅さ、スピード、粘り、完ぺきに近いチームワークには目をみはらされる。

それらの美点は模範的なスポーツ精神に裏付けされる。日本ではスポーツの本質的な美点がよく理解されているのだ。日本がヨーロッパから遠いことはなんと残念なことか!!

日本—ヨーロッパ間の定期的なハンドボール交流が実現できるならば我々のために利益となろうし頽廃の危機感をもって我々を心配させているヨーロッパ・ハンドボールの現状を改善し正すのに役立つであろう。

もし「スポーツ文化」というべきものがオリンピックの規範であれば日本チームはおそらく金メダルを獲得するであろう、という理由は彼らのすばらしい競技ハーモニィと競技精神は純粋な形でのハンドボールの理想を具現しているからである。

ヨーロッパカップやヨーロッパにおける大きな選手権大会で見せつけられる時としてあきれるほどの、恐るべき喧噪ごしのファイトと比べてなんと対照的であろうか。

不幸にして我がヨーロッパの大多数のファンはラフ・ファイトが好きなようであり、ハンドボールの気品のある特性を破壊することに歓びを感じているようである。

騒々しい狼藉好きの観衆はよりよいハンドボールを生みだすことのできない人々なのだ。

今やハンドボールの多くの試合は憎しみと破壊の本性が支配しているように思える。

日本の優美なプレーはすばらしい清涼剤であり、我々とヨーロッパの関係者が日本を見習わず、原始的な本性を抑える努力をしないかぎりハンドボールは衰微していくであろう。ミュンヘンにおける日本の登場を重ねて注目したい。

アメリカのハンドボール

TEAM・HANDBALL

ミュンヘンオリンピック出場権を掌中にしたアメリカ・ハンドボール界がこのところがぜんクローズアップされて来ている。
かつて関西学生界で活躍した荘林康次氏（神戸大ＯＢ、在ニューヨーク）からの資料などをもとにアメリカの球史や近況を探ってみた。（編集部）

ベルリン五輪にも出場

アメリカのミュンヘンオリンピック出場（本誌前号既報）のニュースは意外な反響を呼び、特に高校生の読者から多くの質問が寄せられた。

ハンドボールと云えばヨーロッパのスポーツという印象があまりにも強すぎ、アメリカでこの競技が行なわれていることはあまり知られていなかった。

しかし、一九三六（昭11）年のベルリンオリンピックにも代表を送りこんでおり（＝参加6ヶ国の6位・11人制）、一九三七（昭12）年に日本協会が発足したわが国よりも古い歴史をもつているのだ。

それでいながら、アメリカのハンドボールが世界に大きく張り出さなかった理由の一つに、ベルリン大会以後プッツリと活動の糸が切れてしまったことがあげられよう。

二つのハンドボール

アメリカには二つのハンドボールがあり、ふつうハンドボールといえば「ウォール・ハンドボール」(Wall HandBall) を指す。この競技はアイルランド地方で発達、平手でボールを壁に打ちあてて得点を競う個人種目。

われわれの親しんでいるハンドボールは「チーム・ハンドボール」(Team Hand Ball) と呼ばれ、アメリカ・チームハンドボール連盟（ＵＳＴＨＦ）の発足は一九五九（昭34）年とされている。

ベルリン大会の派遣はおそらく国内の他団体によって行なわれたものであろう。

現在、公式競技人口は約一千といわれ中心となっているのはいわゆる北米地域に限られている。これはベルリン参加当時も同じである。カナダに近接した地区に居住していたドイツ人、ドイツ系アメリカ人、同カナダ人たちがこの競技の種まきをしたものと推される。

一九五九年からしばらくは11人制が主体で、一九六三（昭38）年スイスで開かれた第6回世界男子11人制選手権に登場している。この時西ドイツに6―23で敗れた一戦がＵＳＴＨＦにとって初の公式国際試合であった。

カナダが好敵手

7人制（室内）一本化に踏み切ったのはこの大会から帰国直後のようで、早速、一九六四（昭39）年の第5回世界男子7人制選手権にエントリー、国際ハンドボール連盟（ＩＨＦ）からカナダとの予選を課せられている。

カナダは早くから7人制一本で発展してきたようだ。

トロントとニュージャージーシイで行なわれた予選は17―15、16―17の接戦、合計点わずか1点の差でアメリカがチェコの本大会に駒を進めている。

アメリカとカナダのハンドボール界は前述のような地理的な条件もあってしきりと交流、時には合流して活動をつづけた時期もあるようだがこの予選試合以後は、ライバルとして、よい意味での〝対立〟がつづいている。（通算7戦アメリカの3勝4敗）

意欲的な強化対策

アメリカがハンドボールに積極的に取り組みはじめたのはミュンヘンオリンピック採用決定以後といえる。

一九六八（昭43）年、西ドイツの名門ＧＷ・ダンケルセン、ＶＦＬ・グンメルスバッハ（ともに来日）を招待したのを口火に積極的な強化路線を打ち出し、一九七〇（昭45）年の第7回世界男子7人制権手権にも出場した。

この時、予選リーグで日本と初対戦、21―15で日本が勝ったことを覚えていられるファンも多いだろう。

この前後から軍隊スポーツとしても脚光をあびるようになり、各キャンプの体育種目に採用されはじめた。メキシコなど発足間もない南米勢やヨーロッパ各国との交流も活発になり、一九七〇年から今年まで最低いちどはナショナルチームがヨーロッパに出かけ腕をみがいている。

一気に上位進出目ざす

大学スポーツとしても徐々にではあるが進出、各地のスポーツクラブを通じて女子や年少層への普及も堅実なようである。

こうした上向きのムードの拍車をかけるようにミュンヘンオリンピックアメリカ大陸予選では宿敵カナダをはじめメキシコ、アルゼンチンを降して優勝、関係者はいっそう大きな光を見出した感じである。

ナショナルチームの主力はＧＫエデス、バークホルツの前回世界選手権代表をはじめアブラハムソン、サーラペド、ベーカー、ブラスといったところで、オリンピック予選ではテインクル、ロジャースといった新進が活躍したようだ。

5月から6月にかけてルーマニア、ユーゴ、チェコなどに遠征する予定とも伝えられており、アメリカ・ハンドボール界のミュンヘンにかける意欲はなみなみならぬものがある。

反面、一般の関心はまだまだ低く、予選通過を報じたニューヨーク・タイムズ紙もわざわざ「この競技はアイスホッケーとサッカーを合わせたようなもの」と注釈をつけるほどだが、スポーツ王国アメリカが本腰を入れての強化・普及策だけにやがて東部地区から太平洋沿岸にもチームが生まれるものと思われ、抜群のスポーツセンスを誇る黒人選手や長身選手が輩出されれば短時日で世界のＡクラスに仲間入りする可能性は極めて濃い。一気に世界上位進出をもくろむアメリカハンドボール界。日本の発達史と類似点も多く今後の動向は注目に価しよう。

Osaki
営業品目
普通電力量計　電流制限器
精密電力量計　配線用しゃ断器
誘導形自動電圧調整器　配電盤・分電盤・制御器
静止形自動電圧調整器　試験用変圧器
配電線事故捜査器　各種開閉器・しゃ断器
需要電力量遠隔測定装置　数字式テレメーター・データロガー
電力需給用計器用変成器　標準用計器用変成器
リスコンーI形
大崎電氣工業株式會社
本社及び五反田工場　141 東京都品川区東五反田2の2の7　電話 (03)443−7171(大代表)
電信略号「シナガワ」デンキ
蒲田工場　144 東京都大田区多摩川2の8の1　電話 (03)759−6511(代表)
埼玉工場　354 埼玉県入間郡三芳町藤久保58　電話 (0492) 58−1205(代表)

ハンドボール 指導テキスト草案（2）

日本協会普及部編

斯界の懸案であった「指導テキスト」は、前号既報のとおり日本協会普及部によって草案がまとまり15項目にわたる多彩な内容が発表された。

本誌では草案の全文を掲載し、各方面からの助言を求める意向であったが、普及部では全国委員会をはじめとする数次の協議でこのほど一応のまとまりをつけ「第1版」ともいうべき小冊子の発行、頒布を急ぐことになり作業に着手した。この結果、本誌が草案段階の内容を掲載しつづける意味が少くなり今回既報後の主要部分をお伝えし完結としたい。御了承下さい。

<編集部>

ハンドボールの技術体系

ハンドボール技術は他のボールゲームと同よう大きく「攻撃技術」と「防御技術」の二つに分けられ両者はチームテクニック、ユニットテクニック、ワンマンテクニックを主戦技法とすることになろう

さらに、そこから枝葉が拡がりハンドボールの近代戦術は無限といってよいほどの多彩な変化、高度な開発を呼びおこすのである。

次頁の図はそうした流れを系統的にまとめあげたものである。

ハンドボールのトレーニング（モチベイションエクササイズ）

ハンドボールは技術と戦術があるがその基礎となるものは体力である。したがってハンドボールに必要な体力の養成は欠かすことのできないものである。スポーツを容易に、楽しく行なうことはそれ相当の体力がなければその効果は半減するものである。

スキルと体力を常に一体化することによってその目的は達成されるものである。

体力とはなんであるかを猪飼氏は「人間の行動の基礎となる身体的能力」であると定義して次のような体力の体系を示している。

- 体力
  - 身体的要素
    - 行動体力
      - 形態…体格・姿勢
      - 機能
        - 筋力
        - 敏捷性
        - 持久性
        - パワー
        - 平衡性
        - 柔軟性
        - 協応性
    - 防衛体力
      - 構造…器官・組織
      - 機能
        - 温度調節
        - 免疫
        - 身体的ストレス
  - 精神的要素
    - 行動体力……意志・判断・意欲
    - 防衛体力……精神的ストレスに対する

この中での防衛体力とは外界からの働きに対して身体を安全に守る能力のことであり、行動体力とは外界に働きかける身体の能力である。われわれの動作は身体のエネルギーの要素、身体の空間的要素、時間的要素から考えることができる。

今回の指導要領で考えられている体力とは行動体力を目指しており、その行動的体力とは柔軟性、調整力、筋力、瞬発力、持久性を養うことが考えられるのは当然といえよう。

特に球技においてはこれらの総合的体力要素をうまく配分して養成しなければならない。もちろんハンドボールの練習において、これらの体力を培うことができるがそれ以上の高度な技能を得るためには補強的なトレーニングあるいは使用しない（＝負荷の少ない）部分のトレーニングが必要になるわけである。

トレーニングとは狭義に解釈するならば体力を向上させることを目的として一定の刺激をからだに与えることであり、トレーニングによって体の力向上をさせるには一定の原則があり、むやみに刺激負荷を与えても、その目的は達成することができない。

トレーニングの効果は、例えば筋力を増加させるためには筋肉が耐えられないような強い負荷を与えることであり、呼吸循環系を高めるためには呼吸困難を訴えるような負荷を与えなければ効果があがらない。

しかし、その負荷が急速に高めることは傷害、疾病をまねくおそれがあり、またそれらに対しての負荷が常に一定であることは体力の向上を期待することはできない

したがって負荷はその個人に合った段階的負荷の増大が必要であり、またトレーニングに対して「やるのだ」というやる気のある自覚と持続性をもたせることがトレーニングを行なう際の大切な一要素となる。

ハンドボール競技においての基

礎的あるいに基本的な体力となるものは全身持久性であり、その上に立っていろいろの体力的要素を築きあげていくことが大切なことである。

全身持久性にはインターバル・トレーニング、エンデアランス・トレーニングなどがある。また筋力トレーニングにはウエイト・トレーニングが代表的なものとなろう。体力の総合的トレーニングにはサーキット・トレーニング、インターバル・トレーニングが考えられる。すなわちハンドボールにおいては全身持久性を母体として筋力トレーニングをおき、オールラウンドのトレーニングを行なうことが必要である。

◇トレーニング上の注意

①トレーニングは自らの体力にあった処方で漸進的に負荷を与えることが必要である。

特に筋力トレーニングの場合にはいきなり強い負荷を与えることは無理が生じ傷害をきたすことがあるので最善の注意が必要である

②指導者はトレーニングを受ける者の体力の状態を熟知することが大切である。トレーニングの計画はその者の体力に応じた適切な負荷を与えることである。

③中学生以下も最近では体力向上は目ざましいものではあるが機能的な面では今一歩の時期であることを知らなければならない。したがってこの時期の体力養成はモテイベーションエクササイズ的な方法を用いることが賢明である。

また、この時期には体力的にも個人差が大きいのでボールを扱ったトレーニングを工夫する（メディシングボール・トレーニング）ことが、体力そしてボールに対する楽しみが増し、その効果は大であると思う。

◇組み運動　略

◇ボール運動　略

◇基礎技術　略

ハンドボール技術

- 攻撃技術
  - チーム・テクニック
    - セットオフェンス
    - フリーオフェンス
    - ファストブレーク
  - ユニットテクニック
    - ブロックプレー
    - スカイプレー
    - ポストプレー
    - カットインプレー
    - リターンパスプレー
  - ワンマンテクニック
    - シュート
      - 特殊シュート
      - プロンジョンシュート
      - ジャンプシュート
      - ステップシュート
    - フェント
    - ドリブル
      - ワンドリブル
      - 片手連続ドリブル
    - キャッチ
    - パス
      - ラテラルパス
      - バウンズパス
      - バックパス
      - フックパス
      - スイングパス
      - オーバーヘッドパス
      - チェストパス
      - アンダーパス
      - ショルダーパス
    - フットワーク
      - ターン
      - ストップ
      - ダッシュ
- 防御技術
  - チーム・テクニック
    - アサインドデフェンス
    - マンツーマンデフェンス
    - ゾーンデフェンス
  - ユニットテクニック
    - スウィッチ
    - スライド
    - ファイト
    - ピストン
  - ワンマンテクニック
    - ゴールキーピング
    - スタンス
    - ポジション
    - フットワーク
      - クロスステップ
      - サイドステップ
    - チェック
    - カット
      - シュートカット
      - パスカット

ハンドボールの傷害

近年スポーツの普及はめざましいものがある。各種スポーツが身体教育の場にとり入れられるとともに日本の経済成長に伴い余暇の善用としてスポーツが数多くとり入れられるようになり、スポーツ人口の数は過去において予想もできなかったほどの発展を示している。これらスポーツを行なう機会が多くなればなるほど事故の発生数も増える。小さな擦過傷程度のものから、大きいものでは尊い生命も失うことがある。したがって傷害の防止をわれわれは真けんに考えなければならない。その傷害によってその指導者も指導される側にとって精神的な打撃は大きいものであり、その活動が半減することもある。

傷害の発生の原因を大別するならば一つには内的誘因として指導者あるいは指導される側の両者にその注意が足りなくて起きる場合もう一つは外的誘因として身体活動を行なう施設用具に原因がある場合とに区別することができる。

かつて水町四郎教授は「スポーツの外傷の多くは単一の原因で起こることは少なく、いろいろの要因が総合されている場合が多い。これらをその原因によって区別することはむずかしいが」ということで次のような表を示されている

原因	件数
不熟練	1842
練習不足	1270
身体の不調	244
緊張の欠如	946
自己の能力過信	345
反則・粗暴行為	587
設備・器具の欠陥	175
不可抗力	1592
不明	1368
計	8369件

この表を見ても判るように最後の3項目を除いては傷害の原因となっているものはすべて運動をする側にある。せっかくのスポーツに対する動機づけを傷害によって失わさせないように心しなければならない。

（完）

昭和46年度
日本協会常務理事会の動き

◇月例常務理事会（46年4月6日体協）
一、アジア予選出場三ケ国会議の経過報告～航空運賃の負担額はイスラエル60％、韓国30％、大会使用球は日本製～
一、第4回世界女子選手権第2次候補選手14名の決定
一、グンメルスバッハクラブ（ヨーロッパカップ及び西独優勝）の招待打合せ
一、梨花女子大（韓国）の招待決定
一、台湾の審判員とコーチを8月韓国の審判員とコーチを5月に招くことを決定

◇月例常務理事会（5月15日・体協）
一、杉山茂氏の常務理事推せん
一、昭和45年度決算中間報告
一、沖縄協会の機関誌購読料は47年度まで徴収しない
一、アジア予選のナショナル（第1次）エントリーの締切日を6月10日とする
一、梨花女子大の来日日程
一、第13回全日本実業団女子に白花醸造（韓国）をゲストチームとする
一、第18回NHK杯全日本選抜打合せ
一、GW・ダンケルセン（西独）の招待とりやめ

◇月例常務理事会（6月26日・体協）
一、ワクナガ薬品（大阪）に韓国遠征に関する報告書の提出を求める
一、アジア予選のナショナルエントリー締切りをイスラエルに限り7月15日とする
一、アジア予選運営常任委員会（荒川委員長、藤本、杉山、渡辺慶、久田、山田哲委員）を決定
一、第4回世界女子選手権代表発表（プレス発表6月15日）

◇月例常務理事会（7月17日・体協）
一、日韓高校打合せ
一、オリンピック予選候補に近森克彦、大江隆夫両選手を追加
一、日韓学生の遠征報告
一、アジア予選のナショナルエントリー（韓国、日本、イスラエル）の確認と運営打合せ（第1次予算案提出）
一、スウェーデンナショナル招待打合せ
一、全国会議の日程
一、「単独国際交流規程」草案の協議
一、全日本女子・山田監督、井コーチの〃規制〃決定

◇月例常務理事会（8月23日・体協）
一、オリンピック予選候補平岡秀雄選手の辞退承認
一、日台少女交流（名古屋）報告
一、全日本総合選手権打合せ
一、アジア予選の運営打合せ、東京大会の入場料決定
一、アジア予選協賛事業計画、資金委員会委員長に嶋田常務理事

◇月例常務理事会（9月25日・体協）
一、グンメルスバッハ戦会計報告（剰余金351，456円）
一、アジア予選日本代表の決定
一、近藤信行、花輪博選手の国内公式試合出場規制を10月4日付で解除
一、全国理事会議案検討
一、富永劭氏の常務理事推せん
一、全日本中学大会（仮称）の開催は資金的な裏づけに欠け47年度も見送りとする
一、全日本女子の世界選手権壮行式日程
一、アジア予選協賛事業の発表～バッヂ、ネクタイピンの頒布～

◇月例常務理事会（10月16日・体協）
一、アジア予選運営打合せ

◇月例常務理事会（11月8日・体協）
一、全日本総合の女子社会人代表に徳山高OG（山口）を決定
一、アジア予選打合せ
一、アジア各国代表者会議に臨む態度として「アジア連盟結成は時期尚早」を申し合わせる

◇緊急常務理事会（12月8日・日本協会室）
アジア予選役員の決定及び運営常任委の発展的解消にともなう実行委員会の発足

◇緊急常務理事会（11月1日・体協）
一、全日本総合選手権打合せ
一、アジア予選最終エントリー確認

◇緊急常務理事会（11月5日・日本協会室）
一、アジア予選打合せ
一、アジア各国代表者会議打合せ
一、オリンピック候補選手選考委員決定（荒川委員長、村田、勝、安藤、渡辺慶、竹野委員）
一、読売新聞日本スポーツ賞候補に「全日本男子」を推せん

◇月例常務理事会（12月18日・東京体育館）
一、アジア各国代表者会議報告
一、台湾及び中国との交流は当分の間日本協会の事前承認を必要とすることを決定
一、THW・キール（西独）の招待とりやめ
一、GW・ダンケルセン（西独）を47年4月に招待
一、スタディオン・IF（デンマーク）の招待は保留
一、パリ大学男女（フランス）の招待は全日本学連へ一任
一、昭和47年度事業内定
一、中学問題検討常任委員会発足（荒川委員長、入江、栗脇、嶋田渡辺慶委員）
一、毎日放送「オリンピック強化試合」承認

◇月例常務理事会（47年1月14日・体協）
一、第4回世界女子選手権及び欧州遠征報告
一、中学問題検討常任委中間報告により全日本中学（仮称）の47年度実施を決定
一、オリンピック候補25選手発表
一、今後の頂点強化対策～第一、第二次強化合宿コーチとして村田勝、渡辺慶、竹野、北川を決定
一、GW・ダンケルセン招待打合せ
一、47年度予算の編成

◇月例常務理事会（2月11日・体協）
一、全国理事会議案検討
一、46年度会計中間報告

◇月例常務理事会（3月4日・体協）
一、全日本男子の欧州遠征検討
一、愛知教員クの台湾遠征受理
一、キール、ダンケルセン戦の全日本コーチングスタッフとして村田ヘッドコーチら決定
一、財務理事の交替（森岡氏→神田氏）

本誌恒例

昭和46年度 重大ニュース

①ミュンヘンオリンピックアジア予選で全勝、宿願のオリンピック出場権を握る(11月)

36年ぶりで実施されるオリンピック・ハンドボール。斯界あげて目指したミュンヘンへの道の第1歩は全日本のすばらしい試合ぶりでみごとに実った。

日本開催までの起伏をのりこえ我が国に迎えたアジア予選会は日本、イスラエル、韓国による戦いとなり、2回総当りの結果、日本が断然たる強味をみせて全勝。最終日の試合終了後、臨席したエミール・ホルル国際連盟技術委員長から「アジア大陸代表」が認定された。この勝利を機に国内のムードはいちだんと高まり、今年度最大のというより史上最大の〝できごと〟として永く記憶に残ることになろう。

②スウェーデンナショナルなど外国チームの来日相つぐ。

グンメルスバッハ (4月)
梨花大学(女子) (6月)
白花醸造(女子) (7月)
東亜高校 (8月)
スウェーデン (9月)
THW・キール (3月)

オリンピック強化対策としてかつてない来日チームの数であったなかでもヨーロッパカップ2連勝達成の翌々日に姿を見せたグンメルスバッハ(西ドイツ)のパワーハンドボールと世界第6位スウェーデンナショナルの洗れんされた攻守は圧巻。また韓国からの三チームもそれぞれ意義ある交流となり両国のきずなはいっそう太くなった。特に白花醸造は全日本女子実業団(7月・熊本)にゲスト参加という初の試みだった。アジア予選出場国を加えると今年度は実に外国から8チームが来日したことになる。

③全日本総合、新システムで実施 (12月)

ナショナルチャンピオンシップの性格をより強め男子16、女子12チームの精鋭主義が初採用された。予想どおりの成果がありトップレベルの向上につながった。

試合方式やチーム選出に課題も少くはないが、次回後に発展が期待される。女子で山陽女高(広島)が東京女体大を破り話題となった。

④アジア各国代表・会議を開催 (11月)

初の国際会議であった。アジアにおけるハンドボールの普及は日本に与えられた〝責任〟でもあり各国関係者との談合は意義深い。

アジア連盟結成は時期尚早だがオリンピック予選を機にアジアにおけるハンドボールの火は強く燃えあがったといえる。

⑤全日本女子、世界選手権に出場 (12月)

6年ぶりに開かれた世界女子に日本は3度目の出場を果たした。トライアルゲームの好調などから〝上位入賞〟が期待されたがやはり本場との隔絶がひびき9位に終った。しかし次の機会に飛躍をとげるべき足がかりと自信を得たのは収穫である。

⑥全日本高校選手権、男子で47都道府県代表出揃う(8月)

高体連永年の宿願が佐賀代表の登場で遂げられた。女子は鳥取代表待ちでこれも〝時間の問題〟といろ。すばらしいことだ。

全都道府県代表を集めた大会はもちろん初めて。高校界の占める大きさを改めて印象づけた。

⑦全日本学生(男)、韓国へ遠征、好成績おさめる (7月)

5回目を数えた国際定期戦。このところ日韓交流はやや押され気味だっただけに4勝1分の成績は秋のオリンピック予選へ威勢づけの役目にもなった。海外遠征のために「全日本学生選抜軍」が編成されたのは8年ぶりのこのと。

⑧全日本自衛隊連盟の日本協会加盟承認 (4月)

昨年母体づくりができあがり念願の日本協会加盟が成った。これで加盟団体は五つ。全自衛隊選手権(5月・東京)も大会毎に盛大となり、男子24チームのほか女子も3チームがエキシビジョンを行なうほどに成長している。

⑨全日本高校で男・湯沢(秋田)、女・山陽女(広島)に初の栄冠 (8月)

地域差がなくなり、レベルアップいちぢるしい高校界。今年もインター・ハイの栄冠は「初優勝」という感激をともなった。

女子はこれで9年連続して優勝校が替り〝連勝〟は至難なワザになってきた。

男子で東北に、女子で中国に優勝が飾られたのは初めてのことである。

⑩関東で中央大(10月)、関西で大阪経大(5、10月)など学生界に新風吹く。

伝統校勢に代って21年秋加盟の中央、23年秋加盟の大阪経大が東西の学生王座についたのは新鮮であった。来シーズンからの角逐にいっそう興味が湧く。

【その他】▽西ドイツ全国リーグで活躍の近森克彦選手帰国(5月)
▽A・B級審判員審査に初のペーパーテスト(5月)
▽NHK杯、初の「選抜軍」制で実施(6月)
▽台湾・台南県広山小学女子チーム、韓国遠征の帰途2試合(7月)
▽大洋デパート(熊本)の全国大会優勝連続記録「13」に伸びる(7月・10月)=継続中

村田五輪対策部長を表彰
関西運動記者ク優秀指導者

関西地区のスポーツライターによって組織されている関西運動記者クラブはこのほど昭和46年度(第15回)関西スポーツ賞・最優秀指導者として日本協会オリンピック対策部長・村田弘氏(日本協会常務理事、オリンピックアジア予選監督、日体大出、47歳)を推し3月7日大阪で表彰式が行なわれた。この賞はかつて関学ハンドボール部が優秀団体として受けている。

各地の記録

田村紡、ブラザー降す
男子は大同が順当勝ち

第11回東海室内選手権は2月20日岐阜県民体育館に東海4県の予選勝者男女各4チームが参加して行なわれた。

男女とも決勝は2年連続して同じ顔合せとなり、男子は大同製鋼（愛知）が固い守りで本田技研（三重）をおさえて2連勝。

女子は田村紡（三重）が全日本2位のブラザー工業（愛知）を圧倒して全日本総合の雪じょくをとげるとともに8年連続優勝を飾った。

▽男子準決勝（＝1回戦）

大同製鋼（愛知）29（16—3、13—7）10 清商ク（静岡）

本田技研（三重）12（4—2、8—3）6 岐阜教員

▽同決勝

大同製鋼 12（8—2、4—3）5 本田技研

▽女子準決勝（＝1回戦）

ブラザー工業（愛知）23（10—1、13—2）3 オール岐阜

田村紡（三重）27（15—3、12—0）3 清水女商ク（静岡）

▽同決勝

田村紡 19（9—1、10—5）6 ブラザー工業

秋田和洋女高が初優勝
岩手教員クは2連勝飾る

第8回東北総合室内選手権は1月29、30の両日盛岡市の岩手県営体育館などで男女各12チームが参加、トーナメントで争われた。

男子は前年同よう岩手教員クに健斗の湯沢高（秋田）が挑んだが岩手教員クが地力を発揮、高校チャンピオンをおさえて2連勝した。

女子は初めてフルエントリー（6県）が成り激戦を演じた。2連勝を狙う東北ムネカタ（福島）が準決勝で全涌谷（宮城）に敗れる波乱があり、和洋女高（秋田）—全涌谷の決勝は和洋女高が後半鋭い攻撃を見せて快勝、初の栄冠を握った。高校現役の優勝は第1回（昭39）の涌谷高（宮城）以来。

▽男子1回戦

下北手ク（秋田）18（6—5、12—7）12 岩瀬農高（福島）

大石田高（山形）16（8—6、8—7）13 聖光学院高（福島）

西根ク（岩手）14（6—7、8—6）13 鯵ケ沢高（青森）

七戸高（青森）17（8—5、6—9、1—0、2—1）15 東根工高（山形）

▽同準々決勝

湯沢高（秋田）14（7—3、7—1）4 西根ク

大石田高 13（8—4、5—7）11 全仙台大（宮城）

岩手教員ク 30（12—9、18—5）14 七戸高

育英学園高（宮城）16（7—6、9—7）13 下北手ク

▽同準決勝

岩手教員ク 15（7—4、8—5）9 育英学園高

湯沢高 13（6—3、7—5）8 大石田高

▽同決勝

岩手教員ク 18（8—5、10—4）9 湯沢高

▽女子1回戦

六郷高（秋田）6（3—2、3—2）4 米沢女高（山形）

全涌谷（宮城）11（6—3、5—3）6 全青森西高（青森）

涌谷高（宮城）9（2—2、7—3）5 小高農ク（福島）

竹田女高（山形）12（4—0、8—1）1 三本木高（青森）

▽同準々決勝

東北ムネカタ（福島）16（8—2、8—2）4 六郷高（秋田）

全涌谷 11（5—1、6—1）2 花巻南高（岩手）

全岩手 10（4—2、6—2）4 涌谷高

和洋女高（秋田）16（9—0、7—1）1 竹田女高

▽同準決勝

和洋女高 12（5—1、7—3）4 全岩手

全涌谷 5（2—3、2—1、0—0、1—0）4 東北ムネカタ

▽同決勝

和洋女高 9（4—3、5—1）4 全涌谷

福井教員が制勝

▼第8回福井県室内総合選手権（2月・北電体育館ほか）

▽男子準々決勝

福井教員 16—12 若狭高

羽水OB 9—7 高志高

高浜ク 16—10 羽水高

北陸電力 17—8 福井商高

▽同準決勝

福井教員 19—14 羽水OB

高浜ク 17—13 北陸電力

▽同決勝

福井教員 21（10—8、11—8）16 高浜ク

▽女子準々決勝

一般選抜 16—2 武生商

福商OG 12—4 藤島高

若狭高 6—4 高志高

福井商高 4（分）4 若狭OG

抽せんで福井商の勝ち

▽同準決勝

福商OG 9—5 若狭高

一般選抜 5（分）5 福井商高

抽せんで一般選抜の勝ち

▽同決勝

一般選抜 12（3—1、9—1）2 福商OG

女子で小禄高4連勝

▼第5回沖縄総合選手権（1月・首里高）

▽男子準々決勝

琉球大 15—9 沖縄高

沖縄教員 15—11 那覇高

興南イーグルス 14—10 沖縄大

那覇商OB 9―6 那覇商
▽同準決勝
那覇商OB 12―9 興南イーグルス
琉球大 16―4 沖縄教員
▽同決勝
琉球大 13（5―5 8―6）11 那覇商OB
▽女子準々決勝
浦添高 10―4 中頭高
首里高 8―4 興南高
那覇商 14―4 コザ高
小禄高 12―3 沖縄高
▽同準決勝
首里高 4―3 浦添高
小禄高 8―3 那覇商
▽同決勝
小禄高 7（4―2 3―1）3 首里高

女子は全岩手が大勝

▼第14回岩手県総合室内選手権（1月・盛岡）
▽男子1部準々決勝
岩手教員 22―9 生活学園
盛岡商高 21―4 岩手高
盛岡一高 7―3 花巻農高
西根ク 13―11 盛岡商友会
▽同準決勝
岩手教員 16―12 盛岡商高
西根ク 14―9 盛岡一高
▽同決勝
岩手教員 22（11―8 11―5）13 西根ク
岩手教員は2連勝4度目
▽同2部決勝
白亜ク 29―10 I・O・T
▽女子第1ラウンド2回戦
花巻南高 7―3 平舘高
岩手女高 14―3 谷村学院
花巻北高 9―2 大東高大原
花巻農高 5―4 盛岡二高
▽同3回戦
花巻南高 6―3 岩手女高
花巻北高 4―3 花巻農高
▽同4回戦
花巻南高 5―3 花巻北高
▽同チャレンジラウンド（＝決勝）
全岩手 19（10―1 9―3）4 花巻南高
全岩手は2連勝

堺工と住吉学園がつ

▼第23回大阪高校新人選手権（2月・大阪府立体育館）
▽男子決勝トーナメント準々決勝
初芝 7―4 東住吉工
東住吉 12―6 寝屋川
佐野工 7―5 泉北
堺工 17―10 鳳
▽同準決勝
初芝 16―12 東住吉
堺工 21―10 佐野工
▽同決勝
堺工 20（6―3 14―5）8 初芝
堺工は2連勝4度目
▽女子決勝トーナメント準々決勝
東大阪 8―5 三国ケ丘
住吉学園 10―6 大谷
春日丘 13―2 清友
寝屋川 9―4 箕面
▽同準決勝
住吉学園 8―4 東大阪
春日丘 3（分）3 寝屋川
抽せんで春日丘高の勝ち
▽同決勝
住吉学園 5（2―1 3―3）4 春日丘
住吉学園高は5年ぶり2度目の優勝

岩国工、徳山強味示す

▼山口県高校トーナメント（2月徳山市体育館ほか）
▽男子準々決勝
岩国 9―7 下関中央工
早鞆 9―7 下松工
徳山 20―9 下関西
岩国工 23―6 下関一
▽同準決勝
早鞆 12―9 岩国
岩国工 10―7 徳山
▽同3位決定戦
岩国 15（8―5 7―3）8 徳山
▽同決勝
岩国工 15（8―5 7―3）8 早鞆
▽女子準々決勝
徳山 9―3 下関西
宇部女 12―3 坂上
山口中央 18―1 徳山商
高水 10―6 岩国商
▽同準決勝
徳山 12―2 宇部女
高水 6―5 山口中央
▽同決勝
徳山 16（8―2 8―5）7 高水

一般女子は東クラブ

▼神奈川県室内選手権（2月・平沼記念体育館ほか）
▽一般男子準々決勝
日本発条 32―16 少年工OB
神奈川教員団 14―11 日進商会
関東学院大 15―12 日本鋼管
セントラル自動車 20―9 一商ク
▽同準決勝
日本発条 16―9 神奈川教員団
セントラル自動車 17―8 関東学院大
▽同3位決定戦
関東学院大 17―15 神奈川教員団
▽同決勝
日本発条 17（9―5 8―5）10 セントラル自動車
▽同女子決勝リーグ
上溝ク 20―2 川和ク
東ク 17―3 大津ク
大津ク 12―9 上溝ク
東ク 棄権（12―0） 川和ク
上溝ク 7―6 東ク
大津ク 棄権（12―0） 川和ク
【順位】①東ク2勝1敗（得失点差25）②上溝ク2勝1敗（16）③大津ク2勝1敗（1）④川和ク
▽高校男子決勝
一商 14（4―4 10―5）9 桜ケ丘
▽同女子決勝
日野 6（3―1 3―3）4 東
高校の記録は次号再録

編集後記

○……本誌前号で報じた登録料などの大幅値上げは各チームに大きなショックとなっているようだ。

大勢は日本ハンドボール界を支えるためにはやむを得ないと理解を示しているが、それなりの還元を求める声も圧倒的に強い。

法政工OB会（神奈川）の会報はすかさずこの問題を採りあげ、本誌をはじめ日本協会施策が頂点傾斜している点を鋭く突いている

○……日本協会としてもせっぱ詰まっての値上げであり、重ねて全国の協力を切望するものだが、もちろん斯界の姿勢がこのままであってよいというわけではない。

とりわけ底辺対策については他競技団体にも例をみないような新しい企画の実現が待たれる。

○……さる日、日本協会OBともいうべき的場益雄氏にお目にかかれた。いちじ本誌の編集人もつとめられたかただ。「相変らず写真が少ないなァ。地方のファやン読者は中央の動きは機関誌が頼りなのだから――」。有難いお小言である。

○……本誌印刷直前、JOCの派遣ワク決定で記事のさしかえ、ページの入れ替えを行うあわただしさ。本番まであと148日である。（S・S）

合織糸・合織混紡糸

田村紡績株式会社

社長 田村正衛

四日市市東茂福町10—17
TEL 四日市 6—2156（代表）
郵便番号 512

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第九十六号
昭和四十年六月七日（昭和四十七年三月二十五日印刷 発行所
第三種郵便物認可 昭和四十七年四月一日発行 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 大代表（467）三一二一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助 定価 百五十円